

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Iconographical Material for the Study of Tantric Buddhism in India (1) : The Sādhanas of Simhanāda Avalokiteśvara in the Sādhanamālā

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐久間, 留理子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004285">https://doi.org/10.15021/00004285</a>

## インド密教の図像学的資料(1)

——『サーダナ・マーラー』における獅子吼觀自在の成就法——

佐久間 留理子\*

Iconographical Material for the Study of Tantric Buddhism in India (1):  
The *Sādhanas* of *Siṃhanāda-Avalokiteśvara* in the *Sādhanamālā*

Ruriko SAKUMA

This paper presents an annotated Japanese translation of the *sādhanas/dhāraṇī* of *Siṃhanāda-Avalokiteśvara* which appear in the *Sādhanamālā*, a Buddhist text on the iconography and ritual of Tantric Buddhism.

Part 1 explains the historical background of the *sādhana*: (1) the changes in the iconographic features of Buddhist deities, (2) the depiction of the deities in India, and (3) the rituals and visualisation connected with Indian deities and cosmology.

Part 2 describes the textual sources for the Sanskrit and Tibetan texts edited in parts 5 and 6. The Sanskrit text is based on B. Bhattacharyya's edition of the *Sādhanamālā* (Baroda, first edition 1925), Nos. 17, 20, 21, 22, 23 and 25, and on seven manuscripts (Tokyo University [MATSUNAMI 1965: Nos. 451, 452, 453, 454]), Kyoto University [GOSHIMA and NOGUCHI 1983: Nos. 119 and 120] and National Archives, Kathmandu [Bṛhatsūcīpatram Vol. 39: No. 3–387]). The Tibetan text is based on the Peking and the sDe dge editions.

Part 3 describes the iconographical features of *Siṃhanāda-Avalokiteśvara* and the process of visualisation in his *sādhanas*.

Part 4 presents an annotated Japanese translation of the *sādhanas/dhāraṇī* Nos. 17, 20, 21, 22, 23 and 25 of the *Sādhanamālā*.

Part 5 provides the Sanskrit text of these sections.

Part 6 presents the Tibetan text of the same sections.

\* 東海仏教学会，国立民族学博物館共同研究員

1 成就法成立の背景	Nos. 22, 23 獅子吼觀自在成就法
1.1 はじめに	No. 25 獅子吼觀自在成就法
1.2 仏教の諸尊の図像学的変遷	5 サンスクリットテキスト
1.3 神、及び尊格の姿についての関心	No. 17 獅子吼觀自在成就法
1.4 供養と観想	No. 20 獅子吼觀自在成就法
1.5 世界（宇宙）観	No. 21 獅子吼觀自在の陀羅尼
1.6 まとめ	Nos. 22, 23 獅子吼觀自在成就法
2 『サーダナ・マーラー』のテキスト研究	No. 25 獅子吼觀自在成就法
3 獅子吼觀自在の成就法と陀羅尼	6 チベット語テキスト
略号	No. 17 獅子吼觀自在成就法
凡例	No. 20 獅子吼觀自在成就法
4 和訳と訳注	No. 21 獅子吼觀自在の陀羅尼
No. 17 獅子吼觀自在成就法	Nos. 22, 23 獅子吼觀自在成就法
No. 20 獅子吼觀自在成就法	No. 25 獅子吼觀自在成就法
No. 21 獅子吼觀自在の陀羅尼	

## 1 成就法成立の背景

### 1.1 はじめに

インドにおいては周知のごとく、バラモン教やヒンドゥー教等において多様な神々が生み出された。また、仏教においても時代が下るにつれ、仏、菩薩などの様々な諸尊が出現した。これらの神々には、何等かの姿、形をもつと考えられていたものもあれば、そうでないものもある。何等かの姿、形をもつと考えられていたものには、具体的に絵に描けるような姿、形をもつものと、もたないものがあった。さらに、前者の具体的な姿、形をもつものの中にもイコンのごとく外的に表される場合と、観想などにおいて内的に表される場合とがあった。これらの表し方の中、ここでは特に姿、形を内的に表す方法である、成就法（サーダナ、sādhana）を取り上げる。それについての詳細を述べる前に、このような実践方法が、インドにおいて歴史的にいかにか形成されてきたのか、そのあらましについて仏教を中心にまとめておきたい。

### 1.2 仏教の諸尊の図像学的変遷

仏教において、仏は元来、菩提樹のもとで悟りを開き、輪廻より脱した、歴史上の釈尊と深く結び付いていた。しかし、釈尊の入滅後、歴史的な仏は理想化、普遍化さ

れ、過去七仏や阿弥陀のごとき、現実の時間や空間を超越した仏が信仰されるようになった。また、肉体としての身体をもたず、仏法そのものである、普遍的な身体 (dharmakāya, 法身) も考え出され、密教においては大日 (Vairocana) のごとき、人格化された宇宙の統一原理としての仏<sup>1)</sup>、即ち、世界としての仏が出現した。そして、この大日を中心にして、阿閼 (Akṣobhya)、宝生 (Ratnasambhava)、阿弥陀 (Amitābha)、不空成就 (Amoghasiddhi) を加えた、いわゆる五仏が形成された。

このように仏に対する考え方が発展すると並行して、仏以外にいくつかの諸尊のグループが現れた。とりわけ大乘仏教の興隆にともない、菩薩といわれる一群の諸尊が数多く出現した。菩薩は元来、仏になる前の釈尊のことであったが、大乘仏教では、仏になることを誓願すれば誰でもがなり得るものとなった<sup>2)</sup>。さらに、慈悲を具現する観自在など、各々の職能をもった菩薩が現れ、仏にかわって積極的に活躍して、仏と衆生を堅固に結び付ける存在となった。

密教においては、仏の世界を守護する諸尊のグループとして忿怒尊が台頭してきた。それらは、武器である金剛 (vajra) を手にもって釈尊を守る、金剛手 (vajrapāṇi) の性格を基盤とし、後にヒンドゥー教のシヴァ神に大いに影響され、破壊力を象徴する三戟や髑髏などの要素を吸収して成立したとされる<sup>3)</sup>。特に血を入れた髑髏の器のごとく、バラモン教では避けられてきた<血>という要素が忿怒尊を中心に取り入れられた。また、ヒンドゥー教の興隆にともない、女神崇拜が盛んになったが、仏教においてもターラー (多羅) などの多くの女神が台頭し、密教においては仏も女神の妃をとるようになった。

上述した諸尊以外にも、それほど有力ではないが仏教の底辺を支える神々が生まれた。それらは、九曜 (太陽、月、惑星) などの天体が神格化されたもの、四天王、龍神などの神々であり、ヒンドゥー教の世界との緩衝地帯を形成するようになった<sup>4)</sup>。

このように、仏、菩薩、忿怒尊、女神、その他の神々という、諸尊の組織体 (パンテオン)<sup>5)</sup>が、仏を頂点として形成されるようになった。これらの諸尊は、各々の機

1) 金岡 [1969: 165] は、「大日如来の基本的な性格が、絶対的な統一原理の人格化と、その無限な具象化という二つの性格に尽きる」と述べている。

2) 静谷 [1987: 238] には、『原始大乘』の主軸となる思想は、釈迦菩薩のような特定の菩薩だけを考えるのではなく、誰でも作仏の誓願を起して菩薩の道に進めれば、その人は菩薩であり、将来必ず作仏できるとする『凡夫の菩薩』の思想である」と述べられており、誓願すれば誰でも菩薩になり得るとする思想の出現が指摘されている。

3) 小林 [1951: 65] は、執金剛 (vajrapāṇi, 金剛手) が後に、善相と悪相の二つに分化し、悪相において、シヴァ神と結合して、いわゆる忿怒部の諸明王を形成するようになったと指摘している。

4) 立川 [1987b: 134]。

5) 立川 [1987a: 338]。

能、性格を有し、人格神としての様相を帯びている。これらは、世界と結び付けられ、また、姿、形をもつようになり曼陀羅を構成する諸尊としても発展するのである。以下、これらの諸尊を「尊格」と呼ぶことにする<sup>6)</sup>。

### 1.3 神、及び尊格の姿についての関心

次に、バラモン教の神や仏教の尊格は、その姿、形についてどの程度関心がはらわれていたのかを述べておこう。

バラモン教において神々は、何等かの姿、形をもつものとして述べられることがあった。例えば、神像の売買が行われたのではないかとされる記述も残されている<sup>7)</sup>。しかし、インドラ神が、ある時は、天空を覆うと言われ<sup>8)</sup>、ある時は牡牛と言われるように<sup>9)</sup>、神々は、全体的な傾向として、絵に描けるような具体的な姿、形をもつことはなかったと考えられる。例えば、バラモン教のシュラウタ (śrauta) 祭式では、神の力の「姿、形」(rūpa)、あるいは「写像、似姿」(pratimā) であるかのように祭具を使用することはあったが<sup>10)</sup>、神そのものを偶像として直接的に表現することはなかったのである。

仏教においては、当初、仏の教えが至上のものであり、たとえ仏の姿であっても、外的にしる内的にしる、執着の原因となる形として表すことは避けられるべきであった。しかし、釈尊の入滅後、ストゥーパ (仏塔) のように仏の悟りを象徴するものが造られ、さらには、サーンチーやバルフトのストゥーパの塔門の彫刻にみられるように、菩提樹などの象徴表現によって仏が表されるようになった。そして、紀元1世紀頃になるとガンダーラにみられるような人の似姿をもった仏が表現されるようになった。前節 (1.2) でも述べたように、釈尊の入滅後、時代が下るにつれ、様々なかたちで諸尊が発展していくのであるが、それらは外的な姿、形によっても表されるようになり、その性格、属性はさらに強調されていった。そして、このような諸尊の姿、形の表し方は、供養や観想などの行為と深くかかわり合いながら変化していったのである。

6) 仏教における諸尊の展開については 頼富 [1989a: 79-81] に総括されている。その中で「尊格」という用語が用いられており、それにならった。

7) *Rig Veda*, IV, 24, 10. 辻 [1983: 160]。

8) *Rig Veda*, I, 61, 8, 9. Griffith [1896: 83]。

9) *Rig Veda*, II, 12, 12; IV, 23, 7. 辻 [1983: 155, 157]。

10) 井狩 [1989: 59-60]。

## 1.4 供養と観想

供養 (pūjā) は、神に対し、あたかも客人をもてなすように、水や食物等の供物を捧げ、神からは何等かの利益を得るという行為であり、ヒンドゥー教において大いに発展した<sup>11)</sup>。このような行為は、元来、執着を捨て、悟りを求める仏教にとって不要なものであった。しかし、釈尊の入滅後、仏塔崇拝が行われるようになり、やがて、バラモン教以来の儀礼主義を復興し、土着的要素を取り込んで成長してきた密教において、盛んに行われるようになった。供養は、仏像等の外界に存在する「物」に対しても行われていた。しかし、仏教徒、とりわけ大乘仏教の宗教的エリートにとっては、哲学的立場上、外界に「物」が存在することに対する抵抗もあり、尊格の姿、形を内化したかたち(観想)で供養するようになった。そして、尊格の姿を観想する実践方法が行われ、さらには、観想した尊格の姿、形と自己(実践者)とが一体であると体得する実践方法が現れた。

このような流れの中で、尊格の姿、形を観想する、あるいは、それと一体化するという実践方法、即ち、成就法が形成されたのである。これは精神集中を要する技法であり、この点ではインドにおいて古来継承されてきたヨーガ(yoga)の伝統を取り入れたものといえることができる。

バラモン正統学派の一つ、ヨーガ学派の根本教典『ヨーガ・スートラ』には、ヨーガは、心の作用の止滅であると述べられている。一方、成就法においては、心の作用はむしろ活性化させられ、実践者の意識は姿、形の出現、収縮、拡大にともない動きまわる。従って、この点において、成就法は正統派ヨーガと対象的なのである。

成就法において、さらに重要な点がある。それは、観想された姿、形がひとまとまりの閉じられた世界としての意味をもつという点である。この閉じられた世界は、インドにおける世界観と深いつながりがあるので、次にそれについて述べておこう。

## 1.5 世界(宇宙)観

アーリア人によって担われたバラモン教は、祭式を至上とする宗教であった。祭官は神を讃え、供物を捧げることにより、神から恩恵を得ることができた。このような神と人との関係においては、当然のことながら、当初、世界の構造に関して関心がはられることはなかった。しかし、時代が下るにつれ、世界(宇宙)の創造や構造について意識されるようになる。『リグ・ヴェーダ』の「宇宙開闢の歌」(X. 129)には、

11) ヒンドゥー教の一般的な儀礼の一つに *ṣoḍaśopacārapūjā* がある [立川 1983: 105]。

この宇宙は絶対的の唯一物が根源となって展開したと述べられている。ここでは、世界の構造については述べられてはいないが、一つのまとまりのある現象界、即ち、世界が意識されているのである。

仏教においては、世界の存在、あるいは、その構造についても当初、関心がはらわれなかった。しかし、後世、アビダルマの哲学書『俱舎論』にみられるように、世界についての精密な体系が構築されていった。例えば、須彌山 (sumeru) を中心にして、その周りに人間が住む大陸などの大小の陸地や山脈が存在するという世界のモデルが作り上げられたのである。

このような、一つのまとまりのある、具体的な構造をもつ世界モデルが、密教においては、諸尊が配置される容器として取り入れられた。この諸尊が配置された世界(曼陀羅)は、内化された姿、形として観想され、さらには、観想者と一体化されるものとなった。成就法によっては、蓮華などの上に一つの尊格のみが観想されることもあったが、その姿、形は一つのまとまりのある閉じられた世界として意識されていた。この閉じられた世界は実践者によって、日常、実践者を取り囲む世界とは次元の異なる空間として設定されていたのである。

## 1.6 ま と め

成就法は、以上述べた様々な要素が複雑に絡み合って形成されていった。この過程で特筆すべき変化は、神 (devatā) とも呼ばれる尊格が、実践者 (人) と同化するようになり、それによって実践者 (人) は、一つの閉じられた新しい世界の中心に、自己を再生することが可能になったという点である<sup>12)</sup>。

## 2 『サーダナ・マーラー』のテキスト研究

ここで取り上げるテキストは、インドにおいて紀元12世紀頃までに<sup>13)</sup>各々個別に成立し、流布していた成就法 (sādhana), 陀羅尼 (dhāraṇī) 等<sup>14)</sup>が、成就法を中心に

12) 以上の叙述は、立川 [1987a: 336-341, 1989: 289-314] に負うところが大きい。

13) 奥山 [1988: 891] は西暦十二世紀頃にBに近い形のテキストが成立していたとは断定できないと述べている。その理由として、従来、SMの編纂年代の根拠となってきた写本はNepal Samvat 287 (西暦1167年)の写本(ペンドール目録 Add. 1686)であるが、この写本はBにある成就法の半数以下しか含んでいないという点をあげている。

14) 成就法の次第 (sādhnavidhi) あるいは次第 (vidhi) と呼ばれるものもある。

『サーダナ・マラー』(*Sādhnamālā*, 成就法蔓) (略号: SM) 等<sup>15)</sup>のタイトルを付けられ、一つにまとめて編纂された<sup>16)</sup>文献である。「サーダナ」(成就法, *sādhana*) は、字義通りには「生ぜしめること」であり、ここでは、尊格の姿を精神集中によって生ぜしめることを意味する<sup>17)</sup>。成就法において、実践者は尊格の姿を生ぜしめるが、さらには、観想した尊格と一体化する場合もある<sup>18)</sup>。いずれにせよ、成就法は尊格の姿、形を用いたヨーガ (*yoga*) ということができよう。

さて、このテキストとして、現在、三十数本のサンスクリット写本が知られているが、それらについては奥山 [1989: 384–385], 佐久間 [1990] に述べられているので、ここでは省略したい。サンスクリットの標準的テキストとしては B. バッタチャルヤの校訂本 (略号: B) があり、それらには全部で312の成就法、陀羅尼等が収められている。これらは、如来、菩薩、女神、忿怒尊等<sup>19)</sup>の成就法から構成されている。この研究では、これらの中で、特に、観自在菩薩の成就法、儀軌、陀羅尼の和訳とサンスクリット・チベットテキスト校訂をすすめる。

Bの観自在菩薩の成就法等には、次の観自在<sup>20)</sup>が説かれている。それらは、六字観自在、空行観自在、獅子吼観自在、世間主、世自在、ハーラーハラ観自在、蓮華舞自在観自在、ハリハリハリヴァーハナ観自在、三界制御観自在、赤観自在、青頸観自在、幻網観自在、スガティサンダルシャナ観自在、プレータサンタルピタ観自在である。ここでは、これらの中からBの Nos. 17, 20, 21, 22, 23, 25 における獅子吼観自在の成就法と陀羅尼を取り上げ、それらの内容の解説と翻訳、訳注、サンスクリット・チベット訳のテキスト校訂を行う。サンスクリットテキストの校訂には、底本として

15) この他、*Sādhanaśamuccaya*, *Sādhnamālātāntra*, *Sādhanaśāstra*, *Sādhnamālāpañjikā sahita*, *Sādhnamālā-tathā-dhāraṇī*, *Sādhnamālāpañjikā*, *Sādhnamālāprathamakaṇḍaḥ* の名称が知られている [佐久間 1990: 91]。

16) 奥山 [1988: 889–890] は SM のチベット語訳 *sGrub thabs brgya rtsa* (北京版 Nos. 3964–4126) のコロフォンの記述 (北京版 Vol. 80, fol. 338a3–6) を根拠として、このチベット語訳の原本となったサンスクリットテキストが *Abhayākaragupta* によって校訂、編纂されたと述べている。Schieffner [1963: 330–331] は、Thob jig に *Abhayākaragupta* の著作の一つとして *Sādhanaśāstra* (*sGrub thabs brgya rtsa*) が記述されていると述べている。なお、Vistrikov [1970: 199] は Thob jig がチベット伝記文学の総称であると述べており、Schieffner [1963: 330–331] の言う Thob jig が具体的に何を指すのか特定できない。

17) 立川 [1986: 67]。

18) 主に、尊格の姿と真言だけを記すように、内容が簡略化されて述べられた成就法には、実践者と尊格との一体化が述べられていないことが多い。しかし、尊格の姿や真言以外に内容が詳しく記された成就法には、多くの場合、実践者と尊格との一体化が述べられている。

19) 頼富 [1982: 121–123] は SM の諸尊を大きく種類別に整理して 1. 如来 2. 菩薩 3. 明妃 (女尊) 4. 守護尊 5. 護法尊 6. 雑尊に区分している。

20) SM では、「観音」(*Avalokitasvara*) のかわりに「観自在」(*Avalokiteśvara*)、「世自在」(*Lokeśvara*)、「世間主」(*Lokanātha*) という語が用いられている。「世自在」、「世間主」が単独で用いられる以外は「観自在」という訳語で統一した。

Bを使用し、東京大学所蔵の四本のサンスクリット写本 [MATSUNAMI 1965: Nos. 451-454], 京都大学所蔵の二本のサンスクリット写本 [GOSHIMA and NOGUCHI 1983: Nos. 119, 120], ネパール国立考古局内文書局所蔵の貝葉のサンスクリット写本 [*Nepālarājakīya-Vīrapustakālayasthapustakānām Bṛhatsūcīpatram* Vol. 39: No. 3-387] によって校訂した。チベット訳の校訂には、デルゲ版を底本とし北京版によって校訂した。なお、各テキストの該当箇所については凡例を参照されたい。翻訳に際しては、該当テキストの一部の翻訳、あるいは解説を含む Grünwedel [1900: 130], Foucher [1905: 31-34], Mallmann [1948: 50-51, 183-191], Bhattacharyya [1968: 127] を参照した。

### 3 獅子吼観自在の成就法と陀羅尼

観自在<sup>21)</sup> (Avalokiteśvara) は、大乘仏教において最も人気のある菩薩である。菩薩 (bodhisattva) は「悟り」(bodhi) に対して、「勇気」(sattva) をもつものを意味し、元来は成道前の釈尊を示す言葉であった。しかし、大乘仏教においては、自己の悟りのみを求めるだけでなく、むしろ衆生の救済を目的として活動し、仏と衆生を結び付ける存在となった。菩薩には、文殊 (Mañjuśrī), 彌勒 (Maitreya) なども知られているが、観自在は、特に慈悲 (karuṇā) を具現する菩薩としてインドをはじめ、ネパール、チベット、日本などで信仰を集めた。観自在はこのような性格を表現するために、様々な姿として分化し、多くの種類の観自在が発展した。SM にはとりわけインドの後期密教で発展した観自在が収められている。

さて、ここで取り上げる観自在は、獅子吼観自在(世自在) (Simhanāda-Avalokiteśvara, Simhanāda-Lokeśvara) といい、その名称は獅子の鳴き声 (Simhanāda, 獅子吼) を意味する<sup>22)</sup>。Mallmann [1948: 186] は、「ライオンの吠え声によって世界を制するもの」を意味するとしている。しかし、獅子がしばしば、釈尊の例えであ

21) 岩本 [1978: 207-209] によれば、「観自在」(Avalokiteśvara) という語は「観」(avalokita) と「自在」(īśvara) とが複合してできたものであり、この語が全体として「見ることの自在な者」を意味すると解釈している。また、Avalokitasvara というサンスクリット語も存在し、これが「観音」に対応すると述べている。

22) Simhanāda を「獅子の吠え声をもつもの」というように、所有複合語として解釈することもできる。しかし、『維摩経』には「獅子吼」(Tib. *Señ ge'i na ro mñon par bsgrags pa'i dbyañs*) が菩薩の名称として記されている (大正蔵 No. 475, Vol. 14, p. 537b; No. 476, Vol. 14, p. 558a) [大鹿 1970: 146]。長尾・丹治 [1974: 10] の和訳ではこれを「獅子吼し響かせる声」と解している。

るように、この名称は釈尊の説法がライオンの声のごとくとどろき、人々を教化する観自在のことを意味していると考えられる<sup>23)</sup>。

この観自在の尊容は、SM (B) の Nos. 17, 20, 22, 23, 25 の成就法に説かれており、No. 17 の成就法には次のような姿が述べられている。

「全身が白く、一面二臂で、三眼をもち、髪髻冠をつけ、頭に阿弥陀の化仏をつけ、獅子座において輪王坐で坐し、虎皮の衣をまとい、五つの如来が[回りに]広がり、肩に揺れ動く五つの紐を付け、半月によって飾られている。左手にある白い蓮華の上に白い剣があり、その近くに、白い蓮華の様々な良い香りのする花で満ちた白い頭蓋骨がある。〔観自在の〕右側には、白い蓮華の上に白い蛇の巻き付いた白い三戟がある」

以上のような姿を行者(実践者)は自らの心臓の月輪(月の円盤)上にある、フリーヒの文字を変化させることによって観想する。これと同時に、その姿をもつものが自分と一体であることを冥想する。

従来の研究によれば、この尊の尊容には、ヒンドゥー教や仏教の他の菩薩から取り入れられた特徴が認められるとされている。例えば、三つの眼、虎皮の衣、頭蓋骨、蛇の巻きついた三戟、半月といった特徴は、シヴァ神から取り入れたものと考えられる [MALLMANN 1948: 187]。また、乗り物である獅子、肩にはためく五つの紐、剣は文殊(Mañjuśī)より取り入れられたものであると考えられ [MALLMANN 1948: 190]、尊容の折衷的な性格がみとめられる<sup>24)</sup>。シヴァ神からの影響は、当時インドにおいて興隆したヒンドゥー神(特にシヴァ神)の力を仏教側が取り込もうとした表れである。

この尊の作例はインドをはじめ、ネパール、チベット・中国にみられる<sup>25)</sup>。これらの中、年代が比定されている作例には [町田 1968: pl. 86]、11世紀に比定されている作例 [BHATTACHARYYA 1968: fig. 99]<sup>26)</sup>、11-12世紀に比定されている作例 [FOUCHER 1905: pl. XIV; MALLMANN 1948: pl. XIII; HUNTINGTON 1984:

23) 中村 [1988: 313] の「獅子吼観音」(ししくかんのん)の項を参照。

24) Foucher [1905: 31] は、この尊が文殊から乗り物の獣(獅子)と剣を、観自在から、その体の色である白色と頭蓋骨と蛇の絡んだ三戟を借りた神であると述べている。Poussin [1909-1953: 260] は、この尊の姿は、シヴァ神との結合が顕著であり、獅子に坐し本と剣をもつ文殊とも混交したものであると解説している。Getty [1962: 60] は、この尊が、観自在と文殊との形を合わせたものようであると説明している。Zimmer [1984: 181] は獅子をトゥルガー女神から取り入れたものであると述べている。

25) 訳注27参照。

26) 宮治昭氏(名古屋大学助教授)所蔵の写真によれば、所蔵博物館の説明に 11C と記されている。

pl. 155] (いずれもインドの作例) がある。

さて、獅子吼観自在が、成就法において表される過程をまとめ、若干の説明を加えておこう。

(1) 準備段階として、行者は洗顔などをなし (Nos. 17, 20, 22, 23), 心地の良い場所 (No. 17) や清らかな地面 (No. 25) などに安楽な坐 (Nos. 17, 20, 22, 23, 25) で坐すことが記されている。

(2) 行者は自らの心臓に (Nos. 20, 22, 23, 25), 観想の「場」として月輪等を観想し、その上にフリーヒなどの種子 (文字) を観想する。この段階では行者の意識は種子に集約されていく。そして、(3) の段階では、種子より発せられた光によって師や仏や本尊が行者の現前に引き寄せられる。この過程は、(2) の段階で種子に集約された意識が光とともに拡散し、再びまいもどってくることを示していると考えられる。

(4) 供養や懺悔など (Nos. 17, 22, 23, 25) をなし、「オーム、私は空性という智金剛を自性とするものである<sup>27)</sup>」と真言 (mantra) を唱え、空性を加持 (聖化) (Nos. 17, 20, 22, 23), あるいは、修習する (No. 25)。これらは自己浄化の行為であり、また、智金剛という知恵の堅固なる本質を行者が本来もっていることを確認する行為でもある。

(5) 再び種子を観想し、蓮華 (Nos. 17, 22, 23, 25) あるいは月輪 (No. 20) に変化させる。また、その上に、種子を観想し変化させて、蓮華を観想し (No. 20), さらにその上に、観自在の乗り物となる獅子を作り上げる (No. 17, 20, 22, 23, 25)。そして、獅子の上に蓮華 (No. 17), 月輪 (Nos. 20, 22, 23, 25) を観想し、その上にフリーヒという種子を観想する。この過程では、下方の蓮華の台座から獅子へ、そしてその上の種子へと段階的に観想していく。

上述したところの(2)から(3)までの段階は、内的な閉じられた一つの世界を作り上げる過程である。

(3)の段階で、師や仏や本尊が行者の現前に引き寄せられると記されており、この段階では、自らの心臓の上に設定された内的な世界とは異なる、自己の外側の世界がある程度行者に意識されていることが分かる。

(6) Nos. 17, 22, 23 の成就法の記述に従えば、(5)の段階で最後に観想した種子が獅子吼観自在の姿に変化すると同時に、行者と本尊の姿とが一体化すると考えられ

27) 訳注11参照。

る<sup>28)</sup>。No. 20 の成就法の記述では、本尊の姿は観想するが、行者と本尊の姿とが一体化することは述べられていない。No. 25 の成就法の記述では次のように述べられている。行者は(5)の段階で最後に観想した種子の光によって、如来を引き寄せ、自らにそれらの一切の如来を入れて後、自分自身が獅子吼観自在の姿をもつものと観想する。そして、心臓の種子（種子より発する光）によって、智薩埵 (jñānasattva)<sup>29)</sup> を引き寄せ、自らに入れて、如来を遍満させ、自らを灌頂（聖化）すべきであるとしている。このような(6)の段階の記述の中でも、とりわけ No. 25 の記述からは、行者の意識が種子に集中して後、意識が光とともに拡散し、再び行者の側に如来や智薩埵とともにまいもどる過程がみとめられる。

この(6)の段階において、本尊と行者が一体化する過程は、行者が、自らの心臓の上に設定した世界の中に、入り込む過程でもある。この行為によって、行者は、一つのまとまりのある閉じられた新たな世界の中心に自らを置き換えることができると考えられる。

(6)の段階を終えた後、観想より起きる際に、「オーム、アーハ、(フリーヒ)、シンハナーダ、フーム、パト、(スヴァーハー)」などの本尊の名の入った真言を唱える。

(7) 成就法を終えた後、Nos. 17, 22, 23, 25 の成就法では病気を治療するための行為を行う。それは次のようである。地面に落ちていない（直接、牛の肛門より取った）牛糞に真言を唱え、八つの曼陀羅を作る。そして、その曼陀羅に陀羅尼を唱え、曼陀羅に塗った残りの牛糞を陀羅尼で七回清め、病人に塗る。このような行為は No. 21 の陀羅尼にも記されている。

以上が、獅子吼観自在の成就法と陀羅尼の要旨である。

SM の記述は、行者が観想の覚え書きとして作成したものである。従って、彼らにとっては当然のこととして、あるいは、師から弟子へと口伝されるものとして内容が省略されることが多々ある。テキストにこのような性格があるとはいえ、ここでは、テキストの記述に則し、観想における行者の内的な世界の動きを再構成することに努めた。

28) No. 17 の成就法には「…そ [の白いフリーヒの字] を変えて、獅子吼 [観自在] の姿をもつものを自分自身であると見るべきである」と述べられ、その後本尊の尊容が記されている (No. 17 訳文中の (2.2.1))。また、Nos. 22, 23 の成就法には「…フリーヒの文字より生じた、獅子吼観自在の姿をもつものを自分自身であると瞑想すべきである」と述べられ、その後、本尊の尊容が記されている (Nos. 22, 23 訳文中の (2.2.1))。これらの言語表現に従えば、本尊の姿が種子（文字）から変化する、あるいは、出現することと、行者が本尊の姿と一体化することとは同時であると考えられる。

29) 訳注105を参照。

略 号

- (1) SM: *Sādhnamālā*
- (2) SM のテキスト校訂に使用した校訂本と写本は以下の通りである。  
 B: *Sādhnamālā* (B. バッタチャルヤによる校訂本)  
 S1: 東京大学所蔵サンスクリット写本 [MATSUNAMI 1965: No. 451]  
 S2: 同上 [MATSUNAMI 1965: No. 452]  
 S3: 同上 [MATSUNAMI 1965: No. 453]  
 S4: 同上 [MATSUNAMI 1965: No. 454]  
 S5: 京都大学所蔵サンスクリット写本 [GOSHIMA and NOGUCHI 1983: No. 119]  
 S6: 同上 [GOSHIMA and NOGUCHI 1983: No. 120]  
 S7: ネパール国立考古局内文書局所蔵サンスクリット写本 [*Nepālārājakiya-Vīrapustakālayastha-pustakānām Br̥natsūcīpatram* Vol. 39: No. 3-387]
- (3) チベット訳テキスト  
 D: デルゲ版西藏大蔵経: *The Nyingma Edition of the sDe-dge bKa'-gyur and bsTan-'gyur sponsored by The Head Lama of the Tibetan Nyingma Meditation Center* Vol. 61. Oakland: Dharma Publishing.  
 P: 北京版西藏大蔵経: *Tibetan Tripiṭaka, the Peking Edition*, Suzuki Foundation.  
 T1, T2, T3 は凡例参照。
- (4) 校訂中の語句に関するもの  
 om.: omit(s)  
 ins.: insert(s)

凡 例

1. サンスクリットテキストは B(pp. 47-48, 51-54) を底本とし、次のサンスクリット写本を参照して校訂した。No. 17 から No. 25 までの番号は B において付けられた成就法、陀羅尼の番号である。

	No. 17	No. 20	No. 21	Nos. 22, 23	No. 25
S1	18b4-19b1	20a2-20a6	20a6-20b3	20b3-21a4	24b1-25a3
S2	13b3-14a5	14a9-14b3	14b3-14b5	14b5-15a1	17a7-17b7
S3	18b3-19b1	20a2-20a6	20a6-20b3	20b3-21a4	24b1-25a3
S4	12a11-13a1	13a10-13b3	13b3-13b6	13b6-14a3	16a8-16b7
S5	33a4-34b5	35b4-36a5	36a5-36b4	36b4-37b2	43a6-44b3
S6	—	—	—	166a9-167a6	—
S7	31b6-33a1	33a6-33b5	33b5-34a2	34a2-34b4	34b4-35b1

2. チベット語のテキストは次のデルゲ版を底本とし、北京版を参照して校訂した。  
 西藏大蔵経中には、B に対応する訳が、三つのグループに分かれて収められていることが

吉崎 [1979: 15-31], 酒井 [1950: 117] によって紹介されている。各グループに対応するデルゲ版と北京版のナンバーは次の通りである。

T1 D: Nos. 3143-3304, P: Nos. 3964-4126

T2 D: Nos. 3306-3399, P: Nos. 4127-4220

T3 D: Nos. 3400-3644, P: Nos. 4221-4466

Bにおける各々の成就法、儀軌、陀羅尼に対応するデルゲ版、北京版の箇所は、吉崎 [1979: 29], 奥山 [1989: 391-393] によって比定されている。それによれば、ここで使用した成就法、陀羅尼の該当箇所は次の通りである。

	D		P	
No. 17	T3: No. 3414	/	T3: No. 4235	/
No. 20	T1: No. 3155	T3: No. 3418	T1: No. 3976	T3: No. 4238
No. 21	T1: No. 3156		T1: No. 3977	
Nos. 22, 23	T1: No. 3157 T2: No. 3329 T3: No. 3418	/	T1: No. 3978 T2: No. 4150 T3: No. 4239	/
No. 25	T3: No. 3419		T3: No. 4240	

3. テキストと翻訳につけた番号は筆者が成就法、及び陀羅尼の階梯を整理するために付けたものである。但し、これらの細分を示す番号は各成就法間の対応関係を示さない。例えば、No. 17の成就法の(2.1.3)は、No. 20の成就法の(2.1.3)と対応しない。
4. [ ] は筆者が補ったものである。
5. ( ) は筆者が言い替えたものである。
6. 必要に応じて小見出しを〈 〉の中に記した。

## 4 和訳と訳注

### No. 17

獅子吼<sup>1</sup> [観自在]に礼拝します。

(1. 1) 〈帰命文〉

一面二臂で[身体は]白く、三眼で、獅子の乗り物に坐し、一切の病を取り除く、獅子吼尊を私は賞賛します。

(1. 2) 〈観想の準備〉

まず最初に、行者は、口すすぎ<sup>2</sup>などをなし、心地よい場所<sup>3</sup>で、安楽な坐り方<sup>4</sup>で坐して、

(2. 1. 1) 白いア<sup>5</sup>の字より変わった月輪<sup>6</sup>を[観想し]、その上にある、白いフリー

ヒ<sup>7</sup>の字を[自らの]心臓のところで観想すべきである。[そして,]その(フリーヒの字の)光によって三界を照らし, 色究竟天<sup>8</sup>に住する獅子吼[観自在]と一切の師と仏と菩薩を引き寄せ, 現前の空中にとどめて,

- (2.1.2) 次に, 供養と懺悔など<sup>9</sup>をなし, 四梵住<sup>10</sup>を修習して後, 「<sup>11</sup>-オーム<sup>12</sup>, 一切法は空性という智金剛の自性をもつものである。オーム, 私は空性という智金剛の自性を本質とするものである<sup>-11</sup>」と, この真言によって空性を加持<sup>13</sup>すべきである。
- (2.1.3) 次に, 誓願を憶念して, 白いパムの字より変わった<sup>14</sup>-蓮華を[観想し], その上に, 白いア<sup>15</sup>の字より変わった<sup>-14</sup>月輪を[観想し], その上に白いアーハ<sup>16</sup>の字より変わった白い獅子を, その上に, 白いアム<sup>17</sup>の字より変わった白い蓮華を[観想し], そのうてなに広がりつつある光の集まりをもつ白いフリーヒ<sup>18</sup>の字を[観想して後],
- (2.2.1) 〈本尊と行者が一体化する観想〉  
その一切を変えて, 獅子吼[観自在]の姿をもつもの<sup>19</sup>を自分自身であるとするべきである。
- (2.2.2) 全身が白く, 一面二臂で, 三眼をもち, 髮髻冠<sup>20</sup>をつけ, 頭に阿弥陀[の化仏]<sup>21</sup>をつけ, 獅子座<sup>22</sup>において, 輪王坐<sup>23</sup>で坐し, 虎皮の衣をまとい, 五つの如来<sup>24</sup>が[まわりに]広がり, 肩に揺れ動く五つの紐<sup>25</sup>をつけ, 半月によって飾られている[獅子吼観自在]と
- (2.2.3) [その]左手にある白い蓮華の上に白い剣を, その近くにある白い蓮華の上に様々なよい香りのする花で満ちた白い頭蓋骨を[観想し],
- (2.2.4) [本尊の]右側には, 白い蓮華の上に, 白い蛇の巻き付いた白い三戟<sup>26</sup>を[観想すべきである]。
- (2.2.5) このような本尊<sup>27</sup>を瞑想して後, 瞑想により疲れた行者は, 真言を唱えるべきである。この場合にはこれが真言<sup>28</sup>である。「オーム, アーハ<sup>29</sup>, シンハナーダ, フーム<sup>30</sup>, パト, スヴァーハー」
- (3.1) <sup>31</sup>-このとき, 規定された行為 [は次のごとくである]。像の形に作られた, あるいは布に描かれた<sup>-31</sup>本尊の前で, <sup>32</sup>-曼陀羅ごとに, <sup>-32</sup>一回の陀羅尼<sup>33</sup>を[唱えるべきである]。
- (3.2) 〈陀羅尼〉  
その陀羅尼は次のごとく続く。「三法に帰依します。大層慈悲深き聖観自在に, 菩薩に, 摩訶薩<sup>34</sup>に帰命します」。そ[の陀羅尼]は次のごとく続く。

35-「オーム、アカター、ヴィカター<sup>36</sup>、ニカター<sup>37</sup>、カタムカター<sup>38</sup>、カロタヴィールイエー<sup>39</sup>、スヴァーハー」<sup>35</sup>

(3.3) 地面に<sup>40</sup>落ちていない牛糞<sup>41</sup>に真言を唱え、[その牛糞で]八つの曼陀羅を作るべきである。

(3.4) 曼陀羅ごとに、十三回陀羅尼を唱え、各々の曼陀羅に塗られても残った牛糞に七回真言を唱え、そ[の残りの牛糞]を病[人]に塗るべきである。

(3.5) 〈観想の功德〉

第七日、第十三日、第二十一日に、造作五無間罪<sup>42</sup>をなすものたちですら成就する。もし、成就しないなら私は造作五無間罪をなすものとなるう。

獅子吼[観自在]成就法は終わる。

〈奥付け〉

それをなして後、私が富と繁栄を得たところの、その獅子吼尊の成就法により、人々は<sup>43</sup>健康になるだろう。これは学者であるアヴァドゥータ・シュリーアドヴァヤヴァジュラ様<sup>44</sup>の作である。

## 訳 注

1 p. 518 注22参照。

2 サンスクリットは mukhaśucana である。mukha には「顔」あるいは「口」の二つの意味がある。Böhrtlingk [1868: 807] は mukhamśodhana が「口をすすぐこと」を指すと述べており、本文の場合も、これと同様に mukha は「口」を指すと考えられる。

3 この他、B (pp. 1, 28, 38, 54, 254, 419) においては観想をなすべき場所として、庭園の小屋 (ārāmalayana)、祠堂 (devagrha)、人気のない庵 (vijanālaya)、人気のない山の洞窟 (vijanagiriguhā)、ガナ (悪鬼) の[いる]墓場 (ghanaśmaśāna)、祭式のために平たくされた地面 (catvara)、精舎 (vihāra) 等がある。なお、B における観想の場所について詳しくは清水 [1976: 60-62] を参照。

4 āsana には、「坐り方」あるいは「座」の二つの意味がある。T3 はこれを「座」という意味に解しているが、ここでは次のような理由から「坐り方」と解した。Nos. 22, 23 の成就法には mṛduviṣṭare upaviśya sukhāsanasthaḥ (柔らかい座に坐り、安楽な坐り方で坐し) と述べられており、viṣṭara は「座」を、āsana は「坐り方」を指すものとして使い分けている。Bhattacharyya [1968: 433] は、sukhāsana をどんな安楽な坐り方をも指すとしている。

5 S2, S3, S5, S7: am, S4: om。

6 成就法では、行者は最初に観想の対象を生み出す「場」として、自らの心臓に月輪、あるいは日輪 (太陽の輪) を観想する。

7 S1, S3-S5: hri。

8 三界 (欲界、色界、無色界) の内、色界には、十七の天がある。色界は禪定に応じて四

つの段階に分けられる。そのうち、第四の禪定には下から順に、無雲天、福生天、広果天、無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天という八つの天が存在し、色究竟天が色界の最上に位置する（『冠導阿毘達磨俱舍論』Vol. 18, 2a）。これに関する *Abhidharmakośabhāṣya* (p. 111, 24-27) の原文は以下の通りである。 *caturtham anabhrakāḥ puṇyaprasavāḥ bṛhatphalāḥ abṛhā atapāḥ sudṛṣāḥ sudarśanā akaṇiṣṭhā ity etāni saptadaśasthānāni rūpadhātuḥ*。

- 9 七種無上供養 (*saptavidhānuttarapūjā*) を示すものと考えられる。ここでは、供養と懺悔などの具体的な内容は示されていないが、No. 24 の空行世自在成就法 (B, p. 55) では、花、香水、燈明などで師と仏陀と菩薩を供養し、懺悔を表す偈文を唱えることが述べられている。清水 [1976: 65-69] によると、B では七種無上供養の内容、順番は、一定していないが、多くのは懺悔 (*pāpadeśanā*) から数えるものと礼拝 (*vandanā*) から数えるものとの二種に大別される。このように供養と懺悔など (*pūjāpāpadeśanādi*) と示される例はこの他、B (pp. 53, 417) にある。また、B (p. 466) では供養をはじめとして、懺悔、隨喜 (*puṇyānumodanā*)、廻向 (*puṇyapariṇāmanā*)、三歸依 (*triśaraṇagamana*) が示されている。
- 10 No. 24 の空行世自在成就法では、慈悲喜捨を表す偈文を唱えることが述べられている (B, p. 57)。四梵住は、有情が楽を得ることに心に向けて三昧に入ること (慈)、有情が苦を離れることに心に向けて三昧に入ること (悲)、有情が楽を得、苦を離れることに心に向けて三昧に入ること (喜)、有情が平等であり、親しみや怨みがないことに心に向けて三昧に入ること (捨) である（『冠導阿毘達磨俱舍論』vol. 29, 1b-2a）。これに関する *Abhidharmakośabhāṣya* (p. 453, 3-5) の原文は以下の通りである。 *sukhitā vata sattvā iti manasi kurvan mairīṃ samāpadyate. duḥkhitā vata sattvā iti karuṇāṃ modantāṃ vata sattvā iti muditāṃ sattvā ity eva manasi kurvann upekāṃ samāpadyate*。
- 11 これと同様の真言は *Guhyasamājatantra* (p. 11) にもみとめられる。それについて立川 [1987c: 12] は、この真言に含まれる「自性」 (*svabhāva*) という語が肯定的な意味で用いられていると指摘している。この「自性」は、行者が懺悔等を行い、四梵住を修習することによって自己を浄化した後にも残る、否定されない「核」のようなものを意味すると考えられる。そして、真言の言葉に従えば、金剛のごとき知恵の自性をもつものは、空性 (最高の真理) であり、私 (行者自身) であると解釈される。
- 12 B: 「オーム」省略。
- 13 渡辺 [1982: 548-549] は、いわゆる原始仏典と大乘經典のみの資料から「加持」 (サンスクリット: 動詞 *adhiṣṭhā*; 名詞 *adhiṣṭhāna*; 動詞過去受動分詞 *adhiṣṭhita*) を定義しているが、その一部を引用すると次のごとくである。「動詞本来の意味は“強力に立つ”であるが、原始仏教經典以来多くの經典の使用例からみれば仏または菩薩が衆情を守護し教化し指導する目的で、慈悲心から超自然的な現象を生ぜしめることであり、神々や人々も時にはその能力をもつことができる」。また Skorupski [1983: 109] は、加持 (*adhiṣṭhāna*) が「力を与えること」、「祝福すること」、「聖化すること」を意味すると述べている。そして、仏陀や様々なタントラの神々、あるいは、完成したヨーガ行者は他人に伝えることのできる固有の力を持ち、これらの力が他人に伝えられたとき、他人にある行為をさせたり、その内的な性質を変えさせることができると説明している。以上の諸説を参考にして、本文における「加持」の意味を考えると次のごとくである。即ち、ここでは行者は真言を唱

- えることによって自らを加持すると考えられる。行者には空性という最高の真理が威力をもつものとして捉えられており、その力によって行者は自らを浄化させるものと理解される。
- 14 S1, S3-S5, S7: 省略。
- 15 S2: am。
- 16 S1, S5: ā。
- 17 S5 a。
- 18 S1: hri。これは種子 (bija) と言われるもので、SM の成就法では行者はこれを尊格に変化させる。この hrih と言う種子は獅子吼観自在の成就法だけでなく他の観自在の成就法 (B, pp. 29, 31, 33, 36, 46, 65), クルクッラー成就法 (B, pp. 358, 365, 375, 382, 384) に数多くみられる。また、SM の金剛座尊成就法 (B, p. 18), 般若波羅密成就法 (B, p. 322) に述べられる阿弥陀の種子でもある。
- 19 T3 は「もつもの」を省略。
- 20 頭髪を、冠のように高く結い上げた髪型 [逸見 1935: 339]。
- 21 この他、阿弥陀を化仏とする観自在菩薩は B (pp. 40, 43, 46, 47, 51, 53) に数多く述べられている。一方、阿弥陀以外の化仏をもつ観自在菩薩がある。例えば、金剛法 Vajradharma 尊 (B, p. 33) は五仏を化仏とし、世間主 Lokanātha 尊 (B, p. 49) は金剛法尊を化仏とする。なお、獅子吼世自在の彫像例において阿弥陀を化仏とせず、塔 (stūpa) をつける例がある [BANERJI 1933: pl. 34c]。
- 22 Liebert [1976: 271] は、獅子座 (siṃhāsana) が、四本の獅子の足をともなった座、あるいは、獅子によって支えられた蓮華の座であると述べている。また、Gupte [1980: 20] は、獅子座は四本足をもち、長方形、または円形をし、四本の足が小さな獅子でできていると説明している。本文中 (2.1.3) に述べられているように、ここで述べられた獅子座とは蓮華上の月輪にある白い蓮華を背負った獅子を指していると考えられる。獅子吼観自在の獅子座を Foucher [1905: 31], Poussin [1909-1953: 260], Mallmann [1948: 190], Getty [1962: 60] は、剣などと並んで、文殊より取り入れた特徴であると説明している。また、Zimmer [1984: 181] は、獅子座を、「観自在の女性的特性の優位と一致した女神である、ドゥルガーの乗り物 (獅子) より与えられたもの」と述べている。
- 23 転輪聖王の坐法で、輪跏、または輪王跏とも言われる。左足を深く内方に屈し、左膝を直立させるものであると、逸見 [1935: 166-167] に述べられている。また、『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成仏儀軌』(不空訳 大正蔵 No. 957, Vol. 19, p. 326b-c) には、「或作輪王坐，交脚或垂一，及至獨膝堅，輪王三種」と述べられている。即ち、足を交差するものと、一方の足を垂らすものと、一方の膝を立てるものの三種の輪王坐が説かれている。
- 24 Foucher [1905: 34] は「五つの仏が、そ[の獅子吼観自在]の身体より広がりつつ」と訳し、さらに脚注において、造像例 [FOUCHER 1905: fig. 2] における背板上部の縁にみられる五つの仏であると述べている。
- 25 T3: rol pa'i dpa' bo lha dañ zla ba phyed pas brgyan pa (変化した五英雄と半月に飾られた)。このように T3 は、-pañcacira を、-pañcavira (五英雄) と解釈している。また、Mallmann [1948: 189] は、amsalulitapañcaciram を「肩にはためく五つの細い紐」と解釈している。Mallmann [1948: 190] は、これを乗り物である獅子と同様、文殊より

取り入れたものであると述べている。

- 26 三戟とは、元来、シヴァ神の持ち物であり、三股の戟を指す。この他、本尊の特徴である、三眼、虎皮の衣、頭蓋骨、半月なども同様であり、この尊が、シヴァ神より強い影響を受けていることを示している [MALLMANN 1948: 187]。なお、シヴァ神の戟、三眼、虎皮、頭蓋骨はシヴァ神の特徴として *Mahābhārata* (xiii, 14, 119; xiii, 127, 18, 40; xiii, 128, 14) に記述されている。
- 27 以上のごとく、獅子の上に坐し一面二臂で蛇の巻き付いた三戟をともなうなどの特徴をもつ獅子吼観自在の作例は、次の図版に紹介されている。インドの作例：[WADDELL 1894: pl. 1; FOUCHER 1905: fig. 2; BANERJI 1933: pl. 34c; MALLMANN 1948: pl. 13; BHATTACHARYYA 1968: fig. 99, 101; 町田 1968: pl. 86; HUNTINGTON 1984: pl. 155; ZIMMER 1984: pl. 321; MUKHOPADHYAY 1985: fig. 5, 6; NATH 1986: pl. VB]。ネパールの作例：[アモーガヴァジュラ 1982: 7; 立川 1986: 74]。ラマ教（中国・チベット）の作例：[CLARK 1965: pl. A, 6A34, B, 161; GRÜNWEDEL 1970: ABB. 104; 逸見 1975: pl. 551; LOKESH CHANDRA 1986: pl. 640, 2297; 頼富 1982: 202]。
- 28 本文の文脈における真言（マントラ）の意味を考える前に、マントラについて略説しておく。Bharati [1965: 103] は、「真言」のサンスクリット：mantra が、「考える」という動詞の語根  $\sqrt{\text{man}}$  と、手段、道具を示す接尾語 -tra (Pāṇini: 3, 2, 181) とが接合してできたものであると述べている。歴史的にはマントラは古くはヴェーダの時代より存在していた。マントラは、ある種の威力をもち、ブラフマン（祭司）はマントラを用いることによって神々を支配し、また、神を呼び出すことができたことと Crooke [1910-1953: 441] は述べている。ヴェーダの伝統では、四種のマントラがあるとされている (*Kātyāyana śrautasūtra*. I, 3, 1)。それらは Bühler [1901: 97], Staal [1989: 48] の解説によれば、リグ・ヴェーダの韻文 (rc), ヤジュル・ヴェーダの呪く文句 (yajus), サーマ・ヴェーダの歌詠 (sāman), ヤジュル・ヴェーダの一種に属し、大きな声で唱える文句 (nigada) である。一方、仏教において、マントラは仏教徒が用いるべきものではないとして仏陀によって最初は否定されていたが、後に、毒や腹痛などを治癒するためのマントラは、許されたようであると 梅尾 [1927: 438-440] は述べている。マントラは、バラモン教だけでなく仏教においてもヒンドゥー教においても重要な機能をもつようになるが、エリアーデ [1981: 24] は、マントラの機能の重要性について次のように述べている。「それ（マントラの実際的価値と哲学上の重要性）は第一に、精神集中のための補助として用いられた諸音素のヨーガ的機能であり、第二に神秘音に関する古代の諸伝統の再評価を通じての、靈智主義的システムと内化された典礼との精密化である」。エリアーデの指摘した第一の点は仏教における「陀羅尼」（訳注33参照）の機能の一つともつながるものである。また、ヒンドゥー教のマントラの一つでもある、何百万回と繰り返されるジャパ (japa) の中に、高島 [1989: 52-53] は、このヨーガ的機能をもとめている。第二の点はエリアーデ [1981: 26-27] が述べるように、マントラのもつ「神秘的な力」と関係し、それによって行者は仏の境地を得たり、深い罪さえも免れるのである。このような効果はバラモン教に属するグリフヤ・ストラ（家庭経、*Grhyasūtra*）等にも述べられていると Gonda [1980: 214-215] は指摘している。そこでは、悪運、罪、害悪を遠ざけるなどの働きをもつマントラが述べられている。さらに、このようなマントラの側面は仏教の陀羅尼や明呪 (vidyā) にもみとめられる。このマントラのもつ威力は、マントラがその指し示している「事物」であるという事実に

負うているとエリアーデ [1981: 27-28] は述べている。例えば、「般若波羅密多マントラが唱えられることによって、『女神』の姿をとった『宇宙的空の真理』とマントラとの直接的、全体的な同化が存在する」のである。しかし、このようなマントラの「力」を得るためには、Bharati [1965: 106], エリアーデ [1981: 26] が指摘するように、師から弟子へとマントラが伝えられなければならないのである。なお、マントラには、形態的に om 等の短いマントラや一つの文章からなるマントラ等がみとめられる。以上の諸説を参考にして、本文におけるマントラの機能を考えるならば、それには、どちらかといえば、マントラのヨーガ的機能がみとめられる。但し、本文中のマントラは、観想を終わらせるためのものであり、むしろ精神集中を解くためのものであると考えられる。

29 T3 は「フリーヒ」を挿入する。

30 B: huṃ。

31 T3: cko ga 'dis sku gzugs byas te yañ na ras bris byas la (この儀軌によって、[本尊の]像を作り、または布に描き)。

32 T3: so so'i maṇḍala byas la (各々の曼陀羅をつくり)。

33 Waddell [1912: 158] によれば「陀羅尼」(dhāraṇī) は、字義通りには、サンスクリット語の語根 √dhr̥ (保持する) より派生し、「保持するもの」あるいは「(呪力の) 容器」を意味すると述べている。Waddell [1912: 156] は、「陀羅尼」を定義して「定形句の仏教の呪文であり、アニミズムの起源をもつ通俗的な発明である。それは長い間慣れてきた外的な手段によって、外界における表面的な恐れや危険から迷信深い人間を守るために仏教徒が改作したものである」と述べ、災難から人間を守護するという、除災の機能を陀羅尼の中にみとめている。頼富 [1989b: 316-317] は、「仏教において『陀羅尼』が明確な体系をもって登場したのは大乘仏教である」と述べ、その中で中心的位置をしめる経典が『般若経』(一群の経典の総称) であると述べている。その中でも特に『大品般若経』のグループには「陀羅尼」が、経文等を受持し、記憶する能力を指す用例がみとめられると述べている。そして、頼富 [1989b: 331-334] は、このような陀羅尼の他にも、神秘的な威力をもつ陀羅尼が形成され、後世、初期密教などでは、除災招福等の現世利益を目的とする神呪(マントラ、真言)と同化した陀羅尼が成立したと述べている。以上の意見を参照すれば、陀羅尼は、少なくとも、経文を記憶する能力を指す場合と、除災、招福の機能をもつ場合とがあると考えられる。この成就法では、牛糞を用いて曼陀羅を作った後、残った牛糞に陀羅尼が唱えられる。そして、陀羅尼が唱えられた牛糞を病人に塗ることによって、病気が治ると述べられている。この場合の陀羅尼には、現世利益を目的とした除災の機能があると理解される。

34 S4 は「摩訶薩」を省略。

35 同様の真言は *Guhyasamājatantra* (p. 60) にもみられる。

36 「ヴィカターよ」。vikāte は vikāṭa の女性形の呼格 (vocative) と考えられる。vikāṭa は Edgerton [1970: 479] によればヤクシャ (神靈) の名称である。

37 S1: trikaṭe S2, S3, S4: trikaṭe を加える。S5: 省略。

38 「カタンカターよ」。kaṭaṃkaṭa は Edgerton [1970: 164] によればヤクシャの名称である。S1: kaṭakaṃṭe。

39 「頭蓋骨の英雄よ」。この語は karotavīrya (頭蓋骨の英雄) の女性形の呼格と考えられる。また、この語は、マハーバーラタに、シヴァ神の千の名前の一つとして記されている

(*Mahābhārata*, XII, Appendix 1, No. 28, 209)。S2, S3: *karotavīryya*, S4: *rotavīryya*。

40 B, S1-S5, S7 は「地面に」を省略。

41 牛の肛門より直接採取された牛糞を示す。

42 次の五つの罪である。母を殺害すること(害母)。父を殺害すること(害父)。阿羅漢を殺害すること(害阿羅漢)。僧伽の団結を破ること(破和合僧)。悪心をもって仏身の血を出すこと(悪心出仏心血) (『冠導阿毘達磨俱舍論』 Vol. 17, 15a)。これに関する *Abhidharma-kośabhāṣya* (p. 259, 8-9) の原文は以下の通りである。 *pañcānantaryāṇi karmāvaraṇam. tadyathā māṭṛvadhāḥ piṭṛavdho arhadvadhāḥ samghabhedaḥ tathāgataśarire duṣṭacittarudhirotpādanam. Mahāvīyūtpatti* [ISHIHAMA and FUKUTA 1989: 122-123] にも同じ内容の五無間罪が述べられている。原文は以下の通りである。 No. 2334 *māṭṛghātaḥ* (Tib. *ma bsad pa*), No. 2335 *arhadvadhāḥ* (Tib. *dgra bcom pa bsad pa*), No. 2336 *piṭṛghātaḥ* (Tib. *pha bsad pa*), No. 2337 *samghabhedaḥ* (Tib. *dge 'dun gyi dbyen byas pa*), No. 2338 *tathāgatasyāntike duṣṭacittarudhirotpādanam* (Tib. *de bžin gśeḡs pa la nan sems kyis khrag phyuñ ba*)。

43 T3: *mgon po señ ge sgra dañ ni 'gro ba rnam ni* (獅子吼[尊]と人々は)。

44 B の序文 (p. XCI) に *Advayavajra* は、一般に *Avadhūtipā* として知られ、この成就法の他 B の No. 217 (*Vajravārāhi-sādhana*) と No. 251 (*Saptākṣara-sādhana*) の二つの成就法の著者であると述べられている。

## No. 20

獅子吼<sup>45</sup>[観自在]に帰命します。

### (1) <観想の準備>

最初に口すすぎなどをなし、安楽な坐り方で<sup>46</sup>坐して、

(2. 1. 1) 行者は自らの心臓の日輪に、アーハ<sup>47</sup>の字を見て、眼前に師と仏陀等を導いて来て、懺悔などをなすべきである。

(2. 1. 2) 次に、空性を了解し、加持し、誓願を憶念すべきである。

(2. 1. 3) 次に、ア<sup>48</sup>の字より変わった<sup>49</sup>フームの字を[観想し]、それ(フームの字)より変わった月[輪]を[観想し]-<sup>49</sup>、その上に、オームの字より変わった赤い蓮華を[観想すべきであり]、

(2. 1. 4) その上に、<sup>50</sup>アーハ<sup>51</sup>の字より変わった<sup>-50</sup>白い獅子を、その上の月[輪]に、フリーヒの字より生じた獅子吼尊を[観想すべきであり]、

(2. 1. 5) [獅子吼観自在は、身体が]白く、髮髻冠をいただき、三眼をもち、二臂で、苦行者の衣をまとい、輪王坐で坐す。

(2. 1. 6) <sup>52</sup>左手より延びた<sup>-52</sup>蓮華の上に、燃えさかる上向きの剣を[観想すべきであり]、右側に<sup>53</sup>白い蛇の巻き付いた白い三戟を、<sup>-53</sup>左側に様々なよい

- 香りのする花によって満たされた白い頭蓋骨を[観想すべきであり]、
- (2.1.7) 阿弥陀[の化仏]<sup>54</sup>をいただき、五つの如来が[回りに]広がっており、偉大な変化身<sup>55</sup>をもつ[獅子吼観自在]を瞑想すべきである。
- (2.1.8) 唱える真言は、「オーム、アーハ、フリーヒ、シンハナーダ、フォーム<sup>56</sup>、パト」である。
- <sup>57</sup>-以上が獅子吼世自在成就法である。<sup>-57 58</sup>

## 訳 注

- 45 p. 518 注22参照。
- 46 T1: bde ba'i stan la, T3 stan bde ba la (安楽な座に)。訳注4参照。
- 47 S1, S3, S4: ā。
- 48 S2: āh, S1, S3, S4, S5: ā, S7: am。
- 49 B, S7: 省略。
- 50 S1: 省略。
- 51 S3, S4: ā。
- 52 T1: phyag g'yon pa na gnas pa'i (左手にある…)。
- 53 T3: rtse gsum dkar po bsnams pa (白い三戟を観想する)。
- 54 T1: dbu rgyan la mi bskod pa bzugs (宝冠に阿闍がおり…)。
- 55 「変化身」(nirmānakāya) は、法そのものの体現である「法身」(dharmakāya) を基盤として衆生を教化するために現れた、肉体をもつ現実的な姿をとった仏の身体である。
- 56 B, S2: hum。
- 57 T3: 省略。
- 58 T1 には dge sloñ tshul khriṃs rgyal mtshan gyis bsgyur ro (比丘ツルティム・ゲルツェンが訳した) という奥付けがある。

## No. 21

三法に帰命します。

- (1) <陀羅尼>
- 大層慈悲深き聖観自在に、<sup>59</sup>-菩薩に、摩訶薩に帰命します。そ[の陀羅尼]は次のごとく続く。「オーム、アカター、ヴィカター<sup>60</sup>、ニカター、カタムカター<sup>61</sup>、カローター<sup>62</sup>、カロタヴィールヤ<sup>63</sup>、スヴァーハー」
- (2.1.) これらの陀羅尼を、尊とき聖観自在の<sup>-59</sup>前で<sup>64</sup>-夜明けごとに<sup>-64</sup>、地面に落ちていない牛糞<sup>65</sup>を用いて八つの曼陀羅を作り、曼陀羅ごとに十三回唱えるべきである。
- (2.2) 次に、七回、牛糞の残りに真言を唱え、病人に塗るべきである。

(3) <功德>

一切の病を鎮める。<sup>66</sup>第七日、第十三日、第二十一日に、造作五無間罪をなしたものたちさえもが成就しないなら、私は<sup>-66</sup>造作五無間罪をなすものとなろう<sup>67</sup>。

獅子吼[観自在]の陀羅尼は終わる<sup>68</sup>。

訳 注

59 S4: 省略。

60 「ヴィカターよ」。訳注36参照。

61 「カタンカターよ」。訳注38参照。S1: *kaṭakamte*。

62 「頭蓋骨よ」。S5 *karotake*。

63 「頭蓋骨の英雄よ」。訳注39参照。S3, S7: *karotaviryē*, S5: *rotaviryā*。

64 T1: *nañ bar* (夜明けに), T3: 省略。

65 T1: *sña mor ba'i lci ba* (朝の牛糞)。

66 T2: *gal te ni ma bdun nam bcu gsum mam ni su rtsa gcig tu byas nas mtshams med pa lña byas pas kyañ 'grub par 'gyur ro/gal te ma grub na de'i* (もし、七日、十二日、二十一日に行うなら、造作五無間罪をなしたものたちも、成就するだろう。もし、成就しないなら、この…)。

67 T1: *nas sañs rgyas bcom ldan 'das rnams bslus par yañ 'gyur ro* (私は、諸仏、諸菩薩をだますものとなろう)。

68 T1 には *dge sloñ tshul khriṃs rgyal mtshan gyis bsgyur ba'o* (比丘ツルティム・ゲルツェンが訳した) という奥付けが加わる。

Nos. 22, 23

<sup>69</sup>獅子吼<sup>70</sup>[観自在]尊に帰命します。<sup>-69</sup>

(1) <観想の準備>

まず最初に、行者は口すすぎなどをなして、<sup>71</sup>柔らかい座に坐り、安楽な坐り方で坐し、<sup>-71</sup>

(2. 1. 1) 自らの心臓の月輪に、白いフリーヒの字を見て、現前に、そ[のフリーヒの]光によって引き寄せられた、師と仏陀と菩薩を観想すべきである。

(2. 1. 2) その後、供養と懺悔などをなし、空性を修習して後、<sup>72</sup>「オーム、私は空性という智金剛の自性を本質とするものである<sup>-72</sup>」と、こ[の真言]によって、加持すべきである。

(2. 1. 3) 次に、すぐさまパムの字より変わった、赤い蓮華<sup>73</sup>を、その上に、シムの字より変わった、白い獅子を[観想すべきである]。

(2. 2. 1) 〈本尊と行者が一体化する観想〉

その上に<sup>74</sup>、フリーヒの字より生じた獅子吼世自在の姿をもつもの<sup>75</sup>を自分自身であると瞑想すべきである。

(2. 2. 2) [獅子吼尊は身体が]白く、<sup>76</sup>阿弥陀[の化仏]と髪髻冠をいただき、<sup>-76</sup>三眼をもち、二臂で、苦行者の衣を付け、輪王坐で坐している。

(2. 2. 3) 左手より延びた蓮華の上に、炎の上がる剣と、右に白い蛇の巻きついた白い三戟と、左によい香りのする花によって満たされた白い頭蓋骨[があり]、五つの如来が[回りに]広がっており<sup>77</sup>、<sup>78</sup>偉大な変化の姿をもつものを瞑想すべきである。<sup>-78</sup>

(2. 2. 4) 唱える真言は、「オーム、アーハ、フリーヒ、シンハナーダ、フーム<sup>79</sup>、パト」である。<sup>80</sup>

(3. 1) 〈陀羅尼〉

<sup>81</sup>すぐに陀羅尼が用いられる。<sup>-81</sup>「三法に帰依します。大層慈悲深き、聖観自在に、菩薩に、摩訶薩に<sup>82</sup>、帰命します」。そ[の陀羅尼]は次のごとく続く。

「オーム、アカター、ヴィカター、ニカター<sup>83</sup>、カタムカター、カローター<sup>-84</sup>、カロータヴィールィェー<sup>85</sup>、スヴァーハー」

(3. 2) <sup>86</sup>真言の供養である。<sup>-86</sup>仏の前で、夜明けに、地面に<sup>87</sup>落ちていない牛糞によって、八つの曼陀羅を作り、曼陀羅ごとに、十三回[真言を]唱えるべきである。

(3. 3) 牛糞の残りに七回<sup>88</sup>真言を唱え、病[人]に塗るべきである。

(3. 4) 〈功德〉

一切の病を鎮めるだろう。もし、第七日、第十三日<sup>89</sup>、第二十一日に、造作五無間罪をなすものたちにとってすら、これが成就しないなら、私こそは造作五無間罪をなすものとなろう。

<sup>90</sup>獅子吼[観自在]成就法。<sup>-90 91</sup>

訳 注

69 S1-S5: 省略, S6 「オーム, 獅子吼[尊]に帰命します」。

70 p. 518 注22参照。

71 S1-S5, S7: 省略, T1: bde ba'i stan la gnas te, T2: bde ba'i gdan la 'dug ste, T3: stan bde ba la 'dug ste (安楽な座に坐し)。

72 T1: om ston pa ñid kyi ye śes rdo rje'i ran bzin gyi bdag ñid ni na yin no (オーム,

- 空性の智金剛の自性の本質である)。
- 73 T1: padma dkar po'o (白い蓮華)。
- 74 T1 de'i rgyab tu zla ba la (その背中の月[輪]に)。
- 75 T1, T2, T3 は「もつもの」を省略。
- 76 T1: snañ ba mtha' yas dañ ral pa dañ dbu 'gyan can (阿弥陀と髮髻と冠をもち)。T2 rol pa'i thor tshugs can (髮髻をつけて)。
- 77 T2: sku las de bzhin gśegs pa lña 'phro ba'i gzugs su bsgoms la (身体より、五つの如来が広がった姿のものとして観想して)。
- 78 T1: mña nan las 'das pa chen po'i skur bsgom par bya ba'o (偉大なる涅槃の身体として観想すべきである), T2: 省略, T3: sprul pa chen po'i skur bsgom par byao' (偉大な変化の姿として観想すべきである)。
- 79 B, S4: huṃ。
- 80 以上の成就法は B では(獅子吼成就法は終わる)という奥付けが続き、以下の陀羅尼文 [B では、No. 23 の陀羅尼]と分かたれている。京大写本 (S6) には、「以上がサーダナ集成の獅子吼世自在成就法139節」という奥付けがあり、No. 23 の陀羅尼と分かたれている。東大写本四種 (S1-S4)、京大写本 (S5)、ネパール考古局所蔵の写本 (S7)、蔵訳 (T1, T2) では、以上の成就法は、No. 23 の陀羅尼に直接つながり、その最後に、いずれも「獅子吼成就法」と記されている。また、バッタチャリヤの用いた七種の写本は No. 22 の成就法の最後に「獅子吼成就法は終わる」という奥付けがなく、直接 No. 23 の陀羅尼に続いている。
- 81 T2: sñon du bsñen pa 'bum phrag gcig bzlas pa bya'o (はじめに、礼拝者は十万[の真言]を唱えるべきである)。
- 82 S1 は「摩訶薩」省略。
- 83 S2: nikāṭa。
- 84 S4: karoṭi, S5: karokāṭe。
- 85 S2: karoṭavīryya, S5: roṭavīrye, S7: karovīrye。
- 86 T1: bya ba 'di'i rim pa ni (行為の順番は), T2: 'di'i ñe bar spyod pa ni (この行為は), T3: sñags 'di brjod nas (この真言を唱えて)。
- 87 B, S1-S7 は「地面に」を省略。
- 88 T2 は「七回」を省略。
- 89 T2: 「第十四日」。
- 90 B: 「獅子吼陀羅尼は終わる」, S6: 「以上が成就法集成の獅子吼世自在成就法 140節」, T2: señge sgra'i sgrub thabs slob dpon tsandra go mis mdzad pa rdzogs so (師チャンドラゴーミ[ン]がおつくりになった獅子吼成就法は終わる), T3: 省略。
- 91 次の奥付けが加わる。T1: pañḍita ratna ka ra'i źal sña nas dge sñon tshul khrims rgyal mtshan gyis bsgur ro (師であるラトナーカラがおっしゃるとおりに、比丘ツルティムゲルツェンが訳した) T2: pañḍita don yod rdo rje dañ khams pa lo tsṭsha ba dge sñon ba ris gsyur pa'o (師であるトンヌードルジェーとカムのひとである翻訳者ワリが訳した)。

No. 25

(1. 1) <帰命文>

<sup>92</sup>私は、一切の病を取り除く獅子吼<sup>93</sup>尊に帰命します。[人は]観想という方法のみによって、一切の罪障より解脱すべきである。

(1. 2) <観想の準備>

[行者は]まず最初に、口のすすぎなどをなして、清浄な衣をまとい、清らかな地面に安楽な坐り方で<sup>94</sup>坐して後、

(2. 1. 1) 自らの心臓の月[輪]に、フリーヒ<sup>95</sup>の字を観想し、そ[のフリーヒの字]の光によって一切の如来を引き寄せ、供養して懺悔等をなすべきである。

(2. 1. 2) 次に、慈悲喜捨<sup>96</sup>を修習し、自性の清浄なる[次の]真言を、先に唱えてから空性を観想すべきである。「オーム、一切法は自性が清浄であり、私は自性が清浄である。オーム、私は空性という智金剛の自性を本質とするものである」

(2. 1. 3) その後、<sup>97</sup>自らの身体を幻にすぎないものとみて、<sup>-97</sup>赤いうの字より変わった赤い八つの花卉をもつ蓮華の上に、フリーヒの字から変わった白い獅子を[観想すべきである]。

(2. 2. 1) <本尊と行者が一体化する観想>

<sup>98</sup>そ[の白い獅子]の上の背中の月[輪]に、<sup>-98 99</sup>光輝くフリーヒ<sup>100</sup>の字を[観想し]、そ[のフリーヒの字の光]によって[如来たちを]引き寄せて、自らに一切の如来を入れて後<sup>-99</sup>、自らを獅子吼観自在の姿をもつもの<sup>101</sup>であると観想すべきである。

(2. 2. 2) [身体は]白く、三眼で、髪髻冠をつけ、装飾物をつけず、虎皮の衣をまとい、獅子の座に坐り、輪王坐で[坐し]、月[輪]の座をもち[即ち、座に坐り]、月の光をもてる[獅子吼観自在]を観想すべきである。

(2. 2. 3) 右に<sup>102</sup>、白蛇によって巻き付かれた白い三戟を[観想し]、左に、様々なよい香りのする花に満たされた蓮華の入れ物と、左手より延びた蓮華の上に、燃えさかる剣を[観想し]、<sup>103</sup>自らの身体に、<sup>-103</sup>五つの如来が広がっているのを見るべきである。

(2. 2. 4) 次に、心臓<sup>104</sup>の種子によって、智薩埵<sup>105</sup>を引き寄せ、[自らに]来入させ、如来を遍満させて、[自らを]灌頂すべきである。頭に阿弥陀の印[即ち、化仏]をもつものを自分自身であると思念すべきである。

(2. 2. 5) 次に、神の姿で真言をとなえるべきである。そこで、これが真言である。

「オーム、アーハ、フリーヒ<sup>106</sup>、シンハナーダ、フォーム<sup>107</sup>、パト、スヴァーハー」

- (3. 1) その後<sup>108</sup>、良い香り等の曼陀羅をつくり、供養のために花などを捧げて、崇めるべきである。
- (3. 2) さらに、この真言を唱えるべきである。「オーム<sup>109</sup>、三法に帰依します。大層慈悲深き聖観自在に、菩薩に、摩訶薩に帰命します」。その〔陀羅尼〕は次のごとく続く。「オーム、アカター、ヴィカター<sup>110</sup>、ニカター<sup>111</sup>、カタンカター<sup>112</sup>、カロター<sup>113</sup>、カロータヴィールイエー<sup>114</sup>、スヴァーハー」
- (3. 3) この真言によって曼陀羅の土塊をつかみ、二十一回真言を唱え、病〔人〕に塗った後、〔その病人は〕健康になる。
- 以上、吉祥なる<sup>115</sup>獅子吼世自在の成就法は終わる<sup>116</sup>。

## 訳 注

- 92 T3 は「吉祥なる獅子吼〔尊〕に帰命します」が先につく。
- 93 p. 518 注22参照。
- 94 T3: 「安楽な座に」
- 95 S1: hri。
- 96 訳注10参照。
- 97 T3: raṅ gi lus sgra brñan pa dañ 'dra bar bltas nas (自らの身体をこだまのごとくに見て)。
- 98 T3: de'i sten du (その上に)。
- 99 B: hrīḥkāraṃ saraśmikam tenaivakṣya sarvvatathāgatapraveśena (光輝くフリーヒの字を〔観想し〕、それによって引き寄せて、一切如来の来入によって) T3: hrīḥ yig pa'i 'od zer gyis de bziñ gśegs pa rnam s gdan drañ siñ bdag ñid bcug nas (フリーヒの字の光によって如来たちを引き寄せ、自らに入れて)。
- 100 T3 は「もつもの」を省略する。
- 101 S7: hri。
- 102 T3: 「右手に」。
- 103 T3: 「自らの身体より」。
- 104 T3: 「自らの心臓の」。
- 105 「智薩埵(jñānasattva) は、従来の研究者によって「智的存在」[立川 1986: 89]、「智の存在」[清水 1979: 61]、「悟りへの勇気を有する生類」[立川 1978: 215] 等の意味をもつと考えられている。智薩埵は No. 24 の空行観自在成就法(B, p. 60) では、成就法において三摩耶薩埵(samayāsattva)と一体化する。トゥッチ [1984: 153]によれば、「三摩耶薩埵とは、精神集中の対象である本尊に理念的に委縮した行者が、一時的にその姿を取る『約束の存在』なのである」。三摩耶薩埵と智薩埵が合一することによって、本尊と行者との最終的な一体化が完成すると考えられる[塚塚 1967: 73]。本文中におい

ては、「三昧耶薩埵」という言葉はみられないが、行者は本尊の姿と一体化した後に、智薩埵と合一すると述べられており、三昧耶薩埵が想定されていないのではなく、「三昧耶薩埵」という言葉が省略されているにすぎないと考えられる。清水 [1979: 63-64] は三昧耶薩埵と智薩埵をラサ(情趣)論と結び付け、前者が恒常的情態、後者が情趣に対応すると述べている。また、高田 [1978: 506-507] は、チベット仏教資料に基づき、「三昧耶薩埵とは行者が自ら呼び起こした、あるいは、心に描いた本尊に合致した身をいい、智薩埵とは因位の人間的な菩薩(十地の菩薩)または果位の仏菩薩(金剛薩埵等)を指す」と定義している。

- 106 S1, S3: hrī.
- 107 B, S3: huṃ。
- 108 T3 は「供養の後」を挿入する。
- 109 S2-S5, S7: 省略。
- 110 「ヴィカターよ」, 訳注36参照。
- 111 S1, S3, S5 は kaṭe を, S2, S4 は trikaṭe を挿入する。
- 112 「カタンカターよ」, 訳注38参照。
- 113 「頭蓋骨よ」, S5: karokaṭe.
- 114 S1: karoṭāvīrya。
- 115 B, S1, S3-S5, S7 は「吉祥なる」を省略する。
- 116 S7 は「は終わる」を省略する。

## 5 サンスクリットテキスト

テキスト校訂に際し、次の規則に従った。

1. 筆記の便宜上、語末の m に代用されるアヌスヴァーラについては読みに支障がない限り注記しなかった。
2. 筆記の便宜上、破裂音に属する鼻音に代用されるアヌスヴァーラについては注記しなかった。例えば, paṃca, maṃtra のごときものである。
3. 連声法の規則による語頭の a の消失を示すアヴァグラハが脱落する場合がある。それは, ‘-ātmako ham’ のみであり、注記しなかった。
4. 同一子音の連続を避け、その有無については読みに支障がない限り注記しなかった。例えば, sarva と sarvva, satva と sattva, sidhi と siddhi のごときものである。
5. paśyēt を誤って paśyat と表記することがあるが、それらは表記しなかった。
6. 子音の直前にある r の脱落は読みに支障がない限り注記しなかった。例えば, kuryāt と kuyāt, sūrya と sūya, のごときものである。
7. b と v, ś と s, r と l, jra と ja, th と t の混同がみられるが、読みに支障がない限り注記しなかった。
8. …の表記は判読できない箇所を示す。
9. 種子 (bija) を示すために、本来は母音連続が生じる場合でもハイフンで分割した。例えば, śukla-akāra のごときものである。

No. 17

117-namaḥ siṃhanādāya-117

- (1.1) dvibhujai kamukhaṃ śuklaṃ trinetraṃ<sup>118</sup> siṃhavāhanam<sup>119/120</sup> siṃhanādāma<sup>121</sup> ahaṃ<sup>122</sup> vande sarvavyādhiharaṃ<sup>123</sup> gurum<sup>124//</sup>
- (1.2) ādau tāvan<sup>125</sup> mantri<sup>126</sup> mukhaśaucādikaṃ kṛtvā mano'nukūle<sup>127</sup> sthāne sukhāsanopaviṣṭaḥ<sup>128/129</sup>
- (2.1.1) śukla-akārapariṇataṃ candramaṇḍalam<sup>131</sup> tadupari<sup>132</sup> śuklahriḥkāraṃ<sup>133</sup> hr̥di paśyet/<sup>134</sup> tadraśmibhis<sup>135</sup> traidhātukam<sup>136</sup> avabhāsyākaniṣṭha-bhuvanavartinam<sup>137</sup> siṃhanādaṃ sarvagurubuddhabodhisattvān ākr̥ṣya purata<sup>138</sup> ākāśadeśe<sup>139</sup> saṃsthāpya<sup>140/141</sup>
- (2.1.2) tadanu pūjāpāpadeśanādikaṃ<sup>142</sup> kṛtvā caturbrahmavihārān vibhāvya/<sup>143</sup> om<sup>144</sup> śūnyatājñānavajrasvabhāvāḥ<sup>145</sup> sarvadharmāḥ<sup>146/147</sup> om<sup>148</sup> śūnyatājñānavajrasvabhāvātma<sup>149</sup> 'ham<sup>150</sup> ity ena<sup>151</sup> mantreṇa śūnyatām adhiṣṭhet/<sup>152</sup>
- (2.1.3) tataḥ<sup>153</sup> pranidhānam<sup>154</sup> anusmṛtya<sup>155</sup> śuklapaṃkārapariṇataṃ<sup>156</sup> 157-kamalam<sup>158</sup> tadupari-<sup>157</sup> śukla-akārapariṇataṃ<sup>159</sup> candra-maṇḍalam<sup>160</sup> tadupari śukla-ākārapariṇataṃ<sup>161</sup> śvetasiṃham<sup>162/163</sup> tadupari śukla-aṃkārapariṇataṃ<sup>164</sup> śvetapadmaṃ<sup>165</sup> tadvaraṭake śuklahriḥkāraṃ<sup>166</sup> sphuradraśmivisaram/<sup>167</sup>
- (2.2.1) etat sarvaṃ<sup>168</sup> pariṇamya<sup>169</sup> siṃhanādarūpam<sup>170</sup> ātmānam<sup>171</sup> paśyet<sup>172/173</sup>
- (2.2.2) sarvāṅgaśuklam<sup>174</sup> dvibhujam ekamukhaṃ trinetraṃ<sup>175</sup> jaṭāmukūṭa-dharam<sup>176</sup> amitābhālamkṛtaśirasam<sup>177</sup> māhārājajalīlayā sthitam<sup>178</sup> siṃhāsane<sup>179</sup> vyāghracarmābaradharam<sup>180</sup> sphuratpañca-tathāgatam<sup>181</sup> aṃsalulitapañcacāram<sup>182</sup> ardha-candrālamkṛtam<sup>183/184</sup>
- (2.2.3) vāmahastasthitaśuklapadmopari sitakhaḍgaṃ<sup>185</sup> tatsamīpasthitam śuklapadmopari nānāsugandhikusumaparipūrṇaśuklakaroṭakam<sup>186/187</sup>
- (2.2.4) dakṣiṇe sitapadmopari sitaphaṇiveṣṭitam<sup>188</sup> sitatṛiśūladaṇḍam<sup>189/190</sup>
- (2.2.5) evaṃbhūtam<sup>191</sup> bhagavantaṃ dhyātvā<sup>192</sup> dhyānāt<sup>193</sup> khinno mantri mantram<sup>194</sup> japet/<sup>195</sup> tatrāyam<sup>196</sup> mantraḥ<sup>197/198</sup> om āḥ siṃhanāda<sup>199</sup> hūm<sup>200</sup> phaṭ svāhā/<sup>201</sup>
- (3.1) vidhir atra pratimākṛteḥ<sup>202</sup> paṭagatasya vā bhagavataḥ<sup>204</sup> purataḥ pratimaṇḍalam ekavāradhāraṇyā<sup>205/206</sup>
- (3.2) tatreyam<sup>207</sup> dhāraṇī/<sup>208</sup> namo ratnatrayāya<sup>209</sup> nama<sup>210</sup> āryāvalokiteśvaraṇyā<sup>211</sup> bodhisattvāya<sup>212</sup> mahāsattvāya<sup>213</sup> mahākāruṇikāya<sup>214/215</sup> tad yathā/<sup>216</sup> om akāṭe vikaṭe nikaṭe<sup>217</sup> kaṭamkaṭe<sup>218</sup> karōṭavīrye<sup>219</sup> svāhā/<sup>220</sup>

- (3.3) apatitagomayam abhimantrya aṣṭau maṇḍalakān<sup>221</sup> kuryāt/  
 (3.4) pratimaṇḍalaṃ trayodaśavārān<sup>222</sup> āvartayan<sup>223</sup> dhāraṇīm<sup>224</sup> prati-  
 maṇḍalāmalitaśesagomayaṃ<sup>225</sup> dhāraṇyā<sup>226</sup> saptavārān abhi-  
 mantrya<sup>227</sup> tena vyādhiṃ<sup>228</sup> pralepayet/<sup>229</sup>  
 (3.5) saptame divase trayodaśe<sup>230</sup> divase ekaviṃśatitame<sup>231</sup> vā<sup>232</sup>  
 pañcānantaryakāriṇo 'pi sidhyanti<sup>233/234</sup> 235-yadi na sidhyanti-<sup>235236/237</sup>  
 tadā 'haṃ pañcānantaryakāri<sup>238</sup> syām<sup>239</sup>  
 //iti<sup>240</sup> siṃhanādasādhanam<sup>241</sup> samāptam<sup>242/243</sup>  
 (4) //<sup>244</sup>vidhāya sādhanam dhanyaṃ<sup>245</sup>  
 yad alābhi śubham mayā/<sup>246</sup>  
 siṃhanādasya nāthasya  
 nirvyādhi<sup>247</sup> syāt<sup>248</sup> tato<sup>249</sup> jagat//  
 //<sup>250</sup>kṛtir iyaṃ paṇḍitāvadhūtaśrīmadadvayavajrapādānām//

- 117 S1-S5, S7 add//  
 118 S5 triṇotram  
 119 S1 sihavāhānaṃ, S2 siṃhavāhenam, S4 siṃhavāhana  
 120 S1, S3-S5, S7 om.  
 121 S1 sihanādamam, S4 sihanādam  
 122 S1 om.  
 123 S4 -hara  
 124 S1, S4 guru  
 125 S2, S5 tāvat  
 126 S1 mantri  
 127 S1 'nukule, S4 'nukula  
 128 S1 -nopaviṣṭa, S4 -naupaviṣṭaḥ  
 129 B om./, S1, S3-S5//  
 130 S2, S3, S5, S7 śukla-amkāra-, S4 śukla-omkāra-  
 131 S2, S7 ins./  
 132 S1 -parī  
 133 S1, S3-S5 śuklahrī-  
 134 S1-S4, S7 om./  
 135 S5 tadraśminābhis  
 136 S1 -dhatukam  
 137 S1, S4 bhuvanavarttina, S3 bhuvanavarttina  
 138 S5 ins./  
 139 S5 purataḥ ākāśadeśe  
 140 S1 sathāpya  
 141 B, S5, S7 om./  
 142 S3 -deśenādikaṃ  
 143 B om./, S1, S3, S5//  
 144 B om.  
 145 S1 śūnyatām jñānavajasvabhātmake, S3 śūnyatām jñānavajasvabhāvātmake,  
 S4 śūnyatājñānavajrasvabhāvātmake-, S5 śūnyatām jñānavajrasvabhāvāḥ  
 146 S1 sarvadharmmā  
 147 B, S1-S3 om./  
 148 S5 śūnyatām jñāna-  
 149 S1 -vajasvabhātmake-

- 150 S2, S4 ins./, S1, S3, S5, S7 ins.//  
 151 S1 itenena  
 152 S1, S3, S5//, S7(?) om./  
 153 S1 tata  
 154 S1, S3 praṇidhāna, S5 praṇidhānasam  
 155 S1 samayanusmṛtya, S3 samanussmṛtya  
 156 S1 śuklapaṃkāraparāṇatam, S2 śuklapaṃkāraparīnatam, S5 paṃkāraparīnatam,  
 S7 śukla-aṃkāraparīnatam  
 157 S1, S3-S5, S7 om.  
 158 S2, S4, S7 ins./  
 159 S1, S3-S5, S7 om., S2 śukla-aṃkāraparīnatam  
 160 S1-S5, S7 ins./  
 161 S1, S5 śukla-ākāraparīnatam, S2 śukla-āḥkāraparīnata, S3 śuklaḥ āḥkāraparīnatam,  
 S3 ins./  
 162 S2 śvetasiṃha  
 163 B, S1-S3 om./, S5 ins.//  
 164 S5 śukla-akāraparīnatam  
 165 S1-S5, S7 ins./  
 166 S1 -hrikāra  
 167 B om./  
 168 S1, S2, sarvva  
 169 S2 pariṇamya  
 170 S2 siṃhanādam  
 171 S1 ātmāna  
 172 S1 paśyata  
 173 B om./, S1, S5//  
 174 S1 sarvaṅgaṃ śuklaṃ  
 175 S7 ins./  
 176 S1 jaṭāmukṭidhara, S2 jaṭamakuṭadharaṃ, S3 jaṭamakuṭidharaṃ, S2, S4, S7 ins./  
 177 B amitābhālaṅkṛtaśrasaṃ, S1, S3 amitābhālaṅkṛtaśiraṃ, S4 apitābhālaṅkṛtaśirasa,  
 S5 amitābhālaṅkṛtaśiraṃ  
 178 S4, S5 -taḥ, S1 ins.//, S3, S4, S7 ins./  
 179 S1 sihāsanam, S2-S5, S7 siṃhāsanam, S1-S4, S7 ins./  
 180 S2-S5, S7 ins./  
 181 S1-S5, S7 ins./  
 182 S1 atsalulitapañcacīra, S2 apśūlūlitapañcacīram, S3 atsalulitapañcavīram, S4 atsa-  
 lulitapañcavīram, S1, S3, S4, S7 ins./  
 183 B -candraṅkṛtam, S7 -candraṅkitam  
 184 B om./  
 185 S2, S4, S7 ins./  
 186 S4 -pūrṇakroṭakam  
 187 B om.  
 188 S2 -niveṣṭitam, S4 om, S7 -niveṣṭita  
 189 S4 sitaphatriśūladanḍam  
 190 B om./  
 191 S1 -bhūta  
 192 S1, S4, S7 ins./  
 193 S1 dhyānat  
 194 S1, S7 mantra  
 195 S5 //  
 196 S1 tatrāya

- 197 S1 mantra  
 198 B om./, S1-S5 ins.//  
 199 S5 śiṃhanādāya  
 200 B huṃ  
 201 S1-S3, S5, S7 //  
 202 S5 -te  
 203 S3 paṭūg-  
 204 S1 bhagavantaḥ  
 205 S1, S3 pratimaṇḍalamekavārādhāranyā, S4 pratimaṇḍanamekavārādhāranyā, S5  
 pratimaṇḍalamekavārādhāranyāḥ  
 206 S2 om. S1, S3 //  
 207 S1 tatrāyam, S4 tatraiyam, S5 tatrāyam  
 208 B om./, S2, S3, S5 ins.//  
 209 S1, S3, S5 ins./  
 210 S1 namo, S2, S5 namaḥ  
 211 S5 ins./  
 212 S5 ins./  
 213 S4 om.  
 214 S1, S3 -karuṇikāya, S2 -kāruṇikāya, S5 -kārūnikāya  
 215 S3, S4, S7 om./  
 216 S2, S4 ins.//, S7 om./  
 217 S1 trikaṭe, S2-S4 ins. trikaṭe, S5 om.  
 218 S1 kaṭakaṃṭe  
 219 S2, S3 karoṭaviryya, S4 roṭaviryya  
 220 S1-S5, S7//  
 221 S1 -kā  
 222 S2 vānān  
 223 S1 āvarttayen, S2 āvarttayena  
 224 S2-S4, S7 ins./, S5 dhāraṇī  
 225 S1, S2 apatitamaṇḍalamalitaśeṣagomayan, S4 apatitamaṇḍalamalitaśeṣagamaya, S3,  
 S5 apatitamaṇḍalammalitaśeṣagamayan  
 226 S1, S2-S5, S7 dhāraṇī  
 227 S1 bhimantrā  
 228 S1, S5 vyāpi, S2-S4 vyādhi  
 229 B, S2, S4, S7 om./, S1, S3, S5 //  
 230 S4 trayodaśa, S7 trayodaśame  
 231 S1 -viśatime, S2-S4, S7 -viṃśatime  
 232 S4 cā, S5 ins./  
 233 S1-S4, S7 sidhyati, S5 om.  
 234 B, S1, S3-S5 om./  
 235 S5 om.  
 236 S2-S4, S7(?) sidhyati  
 237 B, S1, S3-S5, S7 om./  
 238 S1 pañcānantaryakāri  
 239 B, S2, S4, S5, S7 ins./, S1, S3 ins.//  
 240 B, S1, S3-S5, S7 om.  
 241 S1 śiṃhanādasādhana, S2 śrisiṃhanādasādhanam  
 242 S1 -ptaḥ  
 243 S1-S5, S7 //  
 244 B om.//  
 245 S1, S3, S4 dhanyāya, S2, S7 dhanyā

- 246 S4 //, S5 om./  
 247 S1, S5 nivvādi  
 248 S1 syāta  
 249 S1 om.  
 250 B/, S2, S4, S7 om.  
 251 S4 paṇḍitāvadhuta-  
 252 S5 -madvay-

No. 20

<sup>253</sup>namaḥ<sup>254</sup> śiṃhanādāya/<sup>255</sup>

- (1) prathamam mukhaśaucādikam<sup>256</sup> kṛtvā sukhāsanastho<sup>257</sup>  
 (2.1.1) yogī svahr̥di sūryamaṇḍale āḥkāram<sup>258</sup> dṛṣṭvā<sup>259</sup> purato<sup>260</sup> guru-  
 buddhādīn<sup>261</sup> ānīya<sup>262</sup> pāpadeśanādikam<sup>263</sup> kuryāt/<sup>264</sup>  
 (2.1.2) tataḥ śūnyatām āmukhīkṛtyādhiṣṭhāya ca praṇiḍhim anusmaret/<sup>265</sup>  
 (2.1.3) tataḥ akārapariṇatam<sup>267</sup> <sup>268</sup>-hūmkāram<sup>269</sup> tatpariṇatam<sup>-268</sup> candram  
 tasyopari omkārapariṇatam<sup>270</sup> raktapadmam/<sup>271</sup>  
 (2.1.4) tadupari<sup>272</sup> āḥkārapariṇatam<sup>273</sup> śvetasiṃham<sup>274/275</sup> tasyopari candre  
 hrīḥkārasambhavam<sup>276</sup> śiṃhanādabhaṭṭārakam<sup>277</sup>  
 (2.1.5) śvetam<sup>278</sup> jaṭāmakuṭinam<sup>279</sup> trinetrām<sup>280</sup> dvibhujam<sup>281</sup> tapasviveśa-  
 dharam<sup>282</sup> mahārājajalīyā sthitam/<sup>283</sup>  
 (2.1.6) vāmahastād utthitapadmopari jvaladūrdhvakhadgam/<sup>284</sup> dakṣiṇe sita-  
 triśūlam sitaphaṇiveṣṭitam<sup>285/286</sup> vāme nānāsugandhipuṣpaiḥ pūrṇam  
 śvetakapālam  
 (2.1.7) amitābhamukuṭinam<sup>287</sup> sphuratpañcatathāgatam<sup>289</sup> mahānirmāṇa-  
 rūpiṇam<sup>290</sup> dhyāyāt/<sup>291</sup>  
 (2.1.8) japamantraḥ<sup>292/293</sup> om āḥ hrīḥ śiṃhanāda<sup>294</sup> hūm<sup>295</sup> phaṭ<sup>296</sup>  
 //iti<sup>297</sup> śiṃhanādasādhanam<sup>298</sup>//

- 253 S1-S5, S7 add//  
 254 S4 nama  
 255 S1-S5, S7 //  
 256 S1, S3 mukhaśaucādikam, S4 mukhaśauvādikam  
 257 S2 sukhāsanastho, S4 sukhāsanastha  
 258 S1, S3, S4 ākāram  
 259 S1, S2, S4 ins./, S3 ins.//  
 260 S1 purato, S2 tato  
 261 S4 -dīnām  
 262 S4 nīya  
 263 S7 -śādikam  
 264 S4, S5 //  
 265 S1 mumukhī-  
 266 S5 //  
 267 S1 ākārapariṇatam, S2 āḥkārapariṇatam, S3, S4, S5 ākārapariṇatam, 27 amkāra-  
 pariṇatam

- 268 B, S7 om.  
 269 S4 huṃkāraṃ, S5 hūṃkāra  
 270 S1, S3, S4 omkāraṃ pariṇataṃ, S5 adds candraṃ tasyopari omkārapariṇataṃ  
 271 B, S1, S3, S4, S7 om./  
 272 S1 tadpariṇataṃ  
 273 S1 om. S2 āḥkārapariṇata, S3, S4 ākārapariṇataṃ  
 274 S1 śvatasimḥam, S2 śvetasiha  
 275 B om./, S7 ins. te  
 276 S2 -sabhava  
 277 S1 sihanādabhaṭṭāraṃ, S2 simḥanādabhaṭṭāra, S4, S5 simḥanādaṃ bhaṭṭāraṃ  
 278 S2 -ta  
 279 S1, S4 jaṭāmukuṭinaṃ, S2 jutāmākuṭina, S7 ins./  
 280 S1, S2 -tra  
 281 S1 -ja, S1-S4, S7 ins./  
 282 S2 om. S4 tapaściveṇadharaṃ, S5 tapaśviśadhari, S2, S4, S5, S7 ins./  
 283 B om./, S4 //  
 284 B om./  
 285 S1 -anīveṣṭitaṃ  
 286 B, S1, S3, S5 om./, S4 ins.//  
 287 S2 -mak-  
 288 S2, S7 ins. /  
 289 S1 sphulayatpañcatathāgataṃ, S2, S4 sphārayet pañcatathāgataṃ, S3 sphurayet pañcatathāgataṃ, S1-S3, S5, S7 ins. /, S4 ins. //  
 290 S1 -ānarūpiṇam-, S2-ānarūpiṇam, S3 ins. /  
 291 S1, S4, S5 //  
 292 S1, S5, S7 -tra  
 293 S1, S2, S4, S5, S7 //  
 294 S1 sihanāda, S2 -de  
 295 B, S2 huṃ  
 296 B /, S3 //  
 297 S7 kāi(?)  
 298 S7 -aḥ

No. 21

<sup>299</sup>namo ratnatrayāya/<sup>300</sup>

- (1) nama<sup>301</sup> āryāvalokiteśvarāya<sup>302</sup> 303-bodhisattvāya mahāsattvāya<sup>304</sup>  
 mahākāruṇikāya<sup>305</sup> tadyathā/<sup>306</sup> om akate<sup>307</sup> vikaṭe nikaṭe  
 kaṭamkaṭe<sup>308</sup> karote<sup>309</sup> karotavīrye<sup>310</sup> svāhā/<sup>311</sup>  
 (2.1) eṣā<sup>312</sup> bhagavata āryāvalokiteśvarasya<sup>-303</sup> 313 purataḥ<sup>314</sup> pratyūṣe<sup>315</sup>  
 apatitagomayenaṣṭaumaṇḍalakān<sup>316</sup> kṛtvā<sup>317</sup> pratimaṇḍalam<sup>318</sup>  
 trayodaśavārān<sup>319</sup> uccārayitavyā/<sup>320</sup>  
 (2.2) tataḥ saptavārān gomayaśeṣam abhimantrya vyādhim upalepayet<sup>321/322</sup>  
 (3) sarvavyādhiṇ<sup>323</sup> upāsamayati/<sup>324</sup> yadi saptame divase trayodaśe vā  
 ekaviṃśatitame<sup>325</sup> vā divase pañcāntaryakāriṇo 'pi na sidhyanti<sup>326/327</sup>  
 tadā ahaṃ<sup>328</sup> pañcāntaryakāri<sup>329</sup> syām iti<sup>330</sup>  
 //simḥanādānām<sup>331</sup> dhāraṇī samāptā<sup>332</sup>//

- 299 S1-S5, S7 //  
 300 S1, S7 om. //, S2, S4 //  
 301 S1, S2 namo, S5 namaḥ  
 302 S4 -rasya  
 303 S4 om.  
 304 S2 om.  
 305 S1 mahākārunikāya, S5 mahākāruṇikāya, S1, S5 ins. //, S2, S3, S7 ins. /  
 306 S1, S5 ins. //  
 307 S1 akate  
 308 S1 kaṭakaṃṭe  
 309 S5 karotake  
 310 B karotavīrya, S5 roṭavīrya  
 311 S1-S3, S5, S7 //, S4 om. /  
 312 S2 eṣāṃ  
 313 S1 āryāvalokiteś---sya  
 314 S4 pūrataḥ  
 315 S1, S3, S4 -yūṣe, S5 -yūṣa  
 316 S4 -mayanāṣṭau  
 317 S1 akṛtvā  
 318 S1 -la  
 319 S4 -śaṃ vārān  
 320 S4 //, S5 om. /  
 321 S4 -lapayet  
 322 B, S7 om. /, S1, S3-S5 //  
 323 S2, S3 sarvvavyādhin, S5 sarvvavyādhiṃ  
 324 S4, S5 //  
 325 S1, S2, S4 -viṃśatime, S3 -viṃśati  
 326 S1, S2 siddhyati, S3, S4 sidhyati  
 327 B, S4, S7 om. /  
 328 S1, S3-S5 om.  
 329 S1, S4 -taryakāri  
 330 B ins. /, S3 //  
 331 S1, S4, S5 śiṃhanādānāma, S2 iti śriśiṃhanādānām  
 332 S2 samāptaṃ

Nos. 22, 23

333-namaḥ śiṃhanādāya/-333

- (1) <sup>334</sup>prathamam<sup>335</sup> tāvan<sup>336</sup> mantrī mukhaśaucādikaṃ kṛtvā<sup>337</sup>- mṛdu-  
 viṣṭare upaviśya sukhāsanasthaḥ<sup>338-337</sup>  
 (2.1.1) svahṛdi candramaṇḍale sitahrīḥkāram<sup>341</sup> drṣṭvā<sup>342</sup> tadraśmisamākṛṣṭān<sup>343</sup>  
 purato<sup>344</sup> gurubuddhabodhisattvān dhyāyāt/<sup>345</sup>  
 (2.1.2) tadanu<sup>346</sup> pūjāpāpadeśanādikaṃ kṛtvā śūnyatām<sup>347</sup> vibhāvya/<sup>348</sup> 349-om  
 śūnyatājñānavajrasvabhāvātmako 'ham<sup>351</sup> ity<sup>352</sup> anenādhitīṣṭhet/<sup>354</sup>  
 (2.1.3) tato-<sup>349</sup> jhaṭīti paṃkārāpariṇatam<sup>355</sup> raktapadmam<sup>356</sup> tadupari<sup>357</sup> śiṃ-  
 kārapariṇatam<sup>358</sup> śvetasiṃham/<sup>360</sup>  
 (2.2.1) tasyopari candre<sup>361</sup> hrīḥkārasambhavam śiṃhanādalokeśvararūpam<sup>362</sup>

- ātmanāṃ dhyāyāt/<sup>363</sup>
- (2.2.2) śuklam amitābhajaṭāmukūṭinaṃ<sup>364</sup> trinetraṃ<sup>365</sup> dvibhujāṃ<sup>366</sup> tapas-  
viveśadharaṃ<sup>367</sup> mahārājālayā<sup>368</sup> sthitam/<sup>369</sup>
- (2.2.3) vāmahastād<sup>370</sup> utthitapadmopari<sup>371</sup> jvalatkhaḍgaṃ<sup>372</sup> dakṣiṇe sitatri-  
śūlam sitaphaṇiveṣṭitaṃ<sup>373</sup> vāme<sup>374</sup> nānāsugandhipuṣpaiḥ<sup>375</sup> pūrṇaṃ<sup>376</sup>  
śvetakapālaṃ<sup>377</sup> sphuratpañcatathāgataṃ<sup>378</sup> mahānirmāṇarūpiṇaṃ<sup>379</sup>  
dhyāyāt/<sup>380</sup>
- (2.2.4) <sup>381</sup>japamantraḥ<sup>382/383</sup> om āḥ hrīḥ siṃhanāda<sup>384</sup> hūṃ<sup>385</sup> phaṭ<sup>386/387</sup>
- (3.1) <sup>388</sup>-tadanantaraṃ<sup>389</sup> dhāraṇī bhavati-<sup>388//390</sup> <sup>391</sup>-namo ratnatrayāya<sup>392</sup>  
nama<sup>393</sup> āryāvālokiteśvarāya<sup>394</sup> bodhisattvāya mahāsattvāya<sup>395</sup> mahā-  
kāruṇikāya<sup>396//397</sup> tad yathā//<sup>398</sup> om akaṭe vikaṭe nikaṭe<sup>399</sup> kaṭaṃ-  
kaṭe-<sup>391</sup> karote<sup>400</sup> karotavīrye<sup>401</sup> svāhā/<sup>402</sup>
- (3.2) ayaṃ<sup>403</sup> mantropacāraḥ<sup>404</sup> bhagavato 'grataḥ<sup>405</sup> pratyūṣe<sup>406</sup> apatita-  
gomayenāṣṭau<sup>407</sup> maṇḍalakān<sup>408</sup> <sup>409</sup>-kṛtvā pratimaṇḍalake-<sup>409</sup> <sup>410</sup>  
trayodaś avārān<sup>411</sup> uccaret<sup>412/413</sup>
- (3.3) gomayaśeṣaṃ<sup>414</sup> saptābhimantrya<sup>415</sup> vyādhīn<sup>416</sup> upalepayet/<sup>417</sup>
- (3.4) sarvavyādhīn<sup>418</sup> upaśamayati<sup>419/420</sup> yadi saptame<sup>421</sup> divase trayodaśe<sup>422</sup>  
divase<sup>423</sup> ekaviṃśatitame<sup>424</sup> vā<sup>425</sup> divase<sup>426</sup> pañcānantaryakāriṇo 'pi<sup>427</sup>  
na sidhyaty<sup>428</sup> ayaṃ<sup>429</sup> tadā 'ham<sup>430</sup> eva pañcānantaryakārī<sup>432</sup>  
bhaviṣyāmi<sup>433/434</sup>

//<sup>435</sup>siṃhanādasādhanam<sup>436</sup>//

- 333 S1-S5 om. S6 om namaḥ siṃhanādāya//
- 334 S1, S2, S4, S5, S7 add //
- 335 S2 -an
- 336 S2 tāvat
- 337 S1-S5, S7 om.
- 338 S6 -sanesthāḥ
- 339 S7 sita / h-
- 340 S4 -hrīḥ // k-
- 341 S2 -kāra
- 342 S2 ins. /
- 343 S2 tadaś-
- 344 S4 puratā
- 345 B om. /, S4-S6 //
- 346 S4 -nū
- 347 S1, S4, S6 śūnyatā
- 348 B om. /, S1, S3-S5 //
- 349 S6 om svabhāvasuddhāḥ sarvadharmā svabhāvasudhohaṃ paścād
- 350 S5 śūnyatāṃ jñāna-
- 351 B, S6 'haṃ
- 352 S3, S5 iti, S5 ins. //
- 353 S2 anān-
- 354 S1, S3-S5 //
- 355 S5 paṃkāreṇa pariṇatāṃ, S6 paṃkāraparinatāṃ,
- 356 S4 raktāṃ padmaṃ, S6 raktapadma

- 357 S1 tadpariṇataṃ, S3 tadpariṇataṃ, S5 tadupariṇataṃ  
 358 S1, S3 om. S2 siṃhārapairṇataṃ S6 sikārapariṇataṃ  
 359 S6 sika-  
 360 B, S1, S3, S5, S6 om. /  
 361 S6 candra  
 362 S1 -lokeśvarūpam  
 363 B om. /, S4-S6 //  
 364 S2 -makūṭinaṃ, S4 -makūṭinaṃ, S6 -makūṭinaṃ, S4, S7 ins. /  
 365 S1 trinetra, S2, S4, S7 ins. /  
 366 S6 dvibhūja, S7 ins. /  
 367 S2 tapaśveśadharaṃ, S4 tapaśviveṇadharaṃ, S2, S3, S7 ins. /, S5 ins. //  
 368 S1 mahārājālarayā, S2 saptajalilayā  
 369 B, S6 om. /  
 370 S6 vāmechastād  
 371 S1, S3, S4 utthitapari, S5 utthitepari  
 372 S5 -ga, S6 -goṃ, S2-S5, S7 ins. /  
 373 S1 sitaphaniveṣṭitaṃ, S4 sitaphaniveṣṭitām, S2, S3, S5, S7 ins. /  
 374 S4 vāriṃ, S6 vāriṃ  
 375 S1 nānāsugandhipuṣpaiḥ, S3 nānāsugandhipuṣpaiḥ, S4 nārāsugandhipuṣpaiḥ, S6  
 sugandhipuṣpaiḥ  
 376 S1, S6, S7(?) pūrṇa  
 377 S2 -la, S2 om. S3, S5 ins. /  
 378 S2, S4 spharataṭṭhāgataṃ, S1-S5 ins. /  
 379 S1, S2 -nīrmmānarūpiṇa, S6 -nīrmmānarūpaṃ, S7 -nīrmmānarūpiṇa  
 380 S1, S3, S5, S6 //  
 381 B, S6 add iti  
 382 S6 japamaṃtra  
 383 S1-S6 ins. //  
 384 S2 siṃhanāde, S5 siṃhanādāya  
 385 B, S4 huṃ  
 386 B adds siṃhanādasādhanaṃ samāptam, S6 adds svāhā//iti sādhanasamuccayesiṃha-  
 nādālokeśvarasādhana ekonacatvāriṃśādhikaśatatamaṭṭhāla//138  
 387 S1-S5, S7 //  
 388 S6 om.  
 389 S7 tadanatara  
 390 B, S5 om. //  
 391 S5 om.  
 392 S6 -yaḥ, S2 /, S6 //  
 393 S1, S3 namaḥ, S2, S4, S6 namo  
 394 S6 -lokrtyeśvarāya  
 395 S1 om.  
 396 S1, S3, S6 -kāriṇikāya  
 397 B, S1, S3-S5 om. //, S2 ins. /  
 398 B, S4, S5, S7 om. //  
 399 S2 -ṭa  
 400 S4 karoṭi, S5 karoṭe  
 401 S2 karoṭavīryya, S5 roṭavīryye, S7 karovīrye  
 402 S1-S7 //  
 403 S4 aya  
 404 S1-S5 ins. //, S6 -ra, S7 ins. /  
 405 S6 -ta

- 406 S5 pratyūṣa  
 407 S5 -yanṣtau  
 408 S6 -la  
 409 S6 om.  
 410 S4 -maṇḍaleke  
 411 S4 trayodavārān, S6 trayodaśamvārān  
 412 S1, S3, S4 uccārayet, S6 uccārayat  
 413 S1, S4, S5 //, S6, S7 om. /  
 414 S2 -ṣa  
 415 S1, S2 saptabhimantrya, S3 saptabhimantrya, S6 saptābhirmatra  
 416 S1, S2, S5 vyādhim, S7 vyādhim  
 417 ॐ, S6 om. /, S1, S3, S5 ins. //  
 418 S1, S6 -dhin, S5 -dhim  
 419 S4 upaśamayanti, S6 upaśamayeti  
 420 S5 //, S6 om. /  
 421 S2 same  
 422 S2 -daśane, S6 -daśa  
 423 S2 diśe  
 424 S1 viśatitame, S5 ekaviṃśati, S6 ekaviṃśatime  
 425 S1, S3, S6 va, S5 om.  
 426 S6 divaśe  
 427 S6 -naṃtaryyekāriṇāpi  
 428 S2 siddhyati, S6 sidhyet  
 429 S5 eyaṃ, S6 ayan, S1-S4, S7 ins. /  
 430 S6 ahamy  
 431 S1 pacān-  
 432 S1 pacānantaryyakāli, S6 pacānantaryyekāri  
 433 S6 bhaviṣyati  
 434 S1, S2, S4, S5, S7 om. /, S3, S6 //  
 435 S2 om. //  
 436 B siṃhanādadhāraṇī samāptā, S1 iti siṃhanādasādhanam, S6 // iti sādhanasamuccayasīṃhanādalokeśvarasādhanacatvāriṃśādhikaśatatamapāṭalaḥ // 140

No. 25

- (1.1) <sup>437</sup>siṃhanādam aham<sup>438</sup> vande sarvavyādhiharam gurum<sup>439</sup>/  
 bhāvanāyogamātreṇa<sup>440</sup> mucyate<sup>441</sup> sarvakilbiṣāt<sup>442</sup>//<sup>443</sup>  
 (1.2) prathamam<sup>444</sup> tāvan<sup>445</sup> mukhaśaucādikam<sup>446</sup> kṛtvā śucivastraprāvṛtaḥ  
 pavitrabhūmau sukhāsanopaviṣṭaḥ<sup>447/448</sup>  
 (2.1.1) svahr̥dī candre hrīḥkāram<sup>449</sup> vibhāvya<sup>450</sup> tena raśminākṛṣya sarva-  
 tathāgatān pūjayitvā pāpadeśanādikam kuryāt/<sup>451</sup>  
 (2.1.2) tato maitrikaruṇā<sup>452</sup> muditopekṣā<sup>452</sup> ca<sup>453</sup> vibhāvya<sup>454</sup> svabhāvasuddha-  
 mantroccāraṇapūrvakam<sup>455</sup> śūnyatām<sup>456</sup> bhāvayet/<sup>457</sup>  
 om svabhāvasuddhāḥ sarvadharmāḥ svabhāvasuddho 'ham/<sup>458</sup>  
 om śūnyatājñānavajrasvabhāvāt<sup>459</sup>mako<sup>460</sup> 'ham iti/<sup>461</sup>  
 (2.1.3) etadanantaram<sup>462</sup> pratibhāsamātrakam<sup>463</sup> svakāyam avalokya<sup>464</sup> rakta-

- rephaparīṇatam<sup>465</sup> raktā<sup>466</sup>ṣṭadalapadmopari hrīḥkāraparīṇāmena<sup>467</sup>  
śvetasiṃham<sup>468</sup>
- (2.2.1) tasyopari prṣṭhacandre<sup>469</sup> hrīḥkāram<sup>470</sup> saraśmikaṃ tenaivākṛṣya sarva-  
tathāgatapraveśenātmānam<sup>472</sup> siṃhanādalokeśvararūpam<sup>473</sup>  
bhāvayet/<sup>474</sup>
- (2.2.2) śvetavarṇam<sup>475</sup> trinetram<sup>476</sup> jaṭāmukuṭīnam<sup>477</sup> nirbhūṣaṇam<sup>478</sup>  
vyāghracarmaprāvṛtam<sup>479</sup> siṃhāsanastham<sup>480</sup> mahārājajilam<sup>481</sup>  
candrāsanam<sup>482</sup> candraprabham bhāvayet/<sup>483</sup>
- (2.2.3) dakṣiṇe<sup>484</sup> sitaphaṇiveṣṭitam<sup>487</sup> trisūlam<sup>485</sup> śvetam<sup>486</sup> vāme nānā-  
sugandhikusumaparipūrītapadmabhājanam<sup>488</sup> vāmahastād  
utthapadmopari<sup>489</sup> jvalatkhaḍgam<sup>490</sup> svakāye<sup>491</sup> pañcatathāgatam<sup>492</sup>  
sphurantam<sup>493</sup> paśyēt/<sup>494</sup>
- (2.2.4) tato<sup>495</sup> hr̥dbijenākṛṣya<sup>496</sup> jñānasattvam praveśayitvā tathāgatān<sup>497</sup>  
sphāryā<sup>498</sup> bhiṣiñced<sup>499</sup> ātmānam maulāv amitābhamudraṇam<sup>500</sup>  
cintayet/<sup>501</sup>
- (2.2.5) tato mantraṃ japet devatāmūrtinā<sup>502/503</sup> tatrāyam<sup>504</sup> mantraḥ<sup>505/506</sup>  
om āḥ hrīḥ<sup>507</sup> siṃhanāda<sup>508</sup> hūm<sup>509</sup> phaṭ svāhā/<sup>510</sup>
- (3.1) tadanu sugandhādimaṇḍalam kṛtvā pūjārtham<sup>511</sup> puṣpādikaṃ<sup>512</sup>  
ḍhaukayitvā<sup>513</sup> arcayet/<sup>514</sup>
- (3.2) punar mālāmantram<sup>515</sup> japet/<sup>516</sup>  
om<sup>517</sup> namo ratnatrayāya<sup>518</sup> nama<sup>519</sup> āryāvalokiteśvarāya bodhisattvāya  
mahāsattvāya mahākāruṇikāya/<sup>520</sup> tadyathā/<sup>521</sup>  
om akāṭe vikāṭe nikāṭe<sup>522</sup> kaṭamkaṭe karote<sup>523</sup> karotavīrye<sup>524</sup> svāhā/<sup>525</sup>
- (3.3) anena mantreṇa maṇḍalamṛttikām<sup>526</sup> gr̥hītvā ekaviṃśativārān<sup>527</sup>  
āvartya<sup>528</sup> vyādhiṃ<sup>529</sup> prelapyā svastho<sup>530</sup> bhavati/<sup>531</sup>  
//iti<sup>532</sup> śrīsiṃhanādalokeśvarasādhanaṃ<sup>533</sup> samāptam<sup>535</sup>//

437 S1-S4, S7 add //

438 S1 aha

439 S1 guru

440 S4 -yomātreṇa

441 S1 mucyete

442 S1, S3, S5 sarvvakilbiṣaḥ, S2 sarvvakilbīṣaiḥ, S4, S7 sarvvakilbiṣaiḥ

443 S2 /

444 S1, S3 -an

445 B, S2 tāvat

446 S4 mukhaṇauvādikaṃ

447 S1 -ṭa

448 B, S1, S3-S5 om. /

449 S1 hrīkāram

450 S5 ins. /

451 S5 //

452 S1, S3-S5 -pekṣām

453 S1, S3 catu, S2 ccha, S5 catur

454 S1, S3, S5 /

- 455 S5 -dharmam̐troccāraṇaḥ  
 456 S1 śūnyatā  
 457 B om. /, S4, S5 //  
 458 B, S4 om. /, S5 //  
 459 S3, S4 śūnyatām̐ jñāna-  
 460 S1 bhātmako-  
 461 S1-S5, S7 //  
 462 S1 tadanantara, S3 tadantaraṃ, S5 tadanantaraṃ  
 463 S2 -susam-  
 464 S4 avaloke  
 465 S1-S4, S7 -ta  
 466 S1 raktaṣṭadala-, S4 rektadala-  
 467 S1 -meṇa  
 468 S4, S7 -siṃha  
 469 S1 -dreḥ, S5 -dra  
 470 S7 hrikāraṃ  
 471 S4 tainai-  
 472 S2 -praśenātmāmānaṃ, S5 -praveśyamānaṃ  
 473 B siṃhanādaṃ lokeśvaraṇapūpaṃ, S4 siṃhanādalikeśvararūpaṃ  
 474 B om. /, S1, S3, S5 //  
 475 S1, S2, S5 -ṇa  
 476 S2 -tra  
 477 S2, S4 -maku-, S4 ins. /  
 478 S1 nibhūṣanaṃ, S2 ins. /  
 479 S4 -carmaṇprākṛtaṃ, S2 ins. /  
 480 S1 sihāsa-  
 481 S2 -lira  
 482 S2 candrāsana  
 483 S2 -ta  
 484 S4 -ne  
 485 S1 triśūra  
 486 S2, S4, S7 ins. /  
 487 S1 -pūrīta-, S5 pūjita-  
 488 S1 jana, S5 ins. //  
 489 S1-S5 utthaṃ padmopari, S7 upasthitaṃ padmopari  
 490 S1, S3-S5 ins. /  
 491 S2, S3 svakāya  
 492 S2 -ta  
 493 S1 sphuranta, S2 spharaṃtaṃ, S5 spharantaṃ  
 494 S1, S3, S5 //, S4, S7 om. /  
 495 S5 tata  
 496 S1 hṛdbījan-, S2 hṛdbījan-, S5 svahṛdvījen-  
 497 S5 -tā  
 498 S2 saṃsphāryyā-  
 499 S1 -bhiceñced, S4 -bhiñcad  
 500 S7 (?) -ṇañ  
 501 S1, S3-S5 //  
 502 S2 -murttinā  
 503 S5 //  
 504 S1 tatrayaṃ  
 505 S5 -ra

- 506 S2, S4, S5 //
- 507 S1, S3 hrī
- 508 S1 siṃhana, S2 siṃhanādāya
- 509 B huṃ, B, S1-S5 ins. /, S7 //
- 510 S1-S5, S7 //
- 511 S1 pūjārtha, S5 pūjādi
- 512 S1, S3 pūṣ-
- 513 S1, S3 dhauvayitvā, S4 tokayitvā
- 514 S1, S3, S5 //
- 515 S1 pūnarmmālā-, S2 punasmālā-
- 516 S1, S3, S5 //
- 517 S2-S5, S7 om.
- 518 S2 ins. //
- 519 S2 namaḥ
- 520 S1, S4, S7 om. /
- 521 S4, S5 ins. //
- 522 S1, S3, S5 ins. kaṭe, S2 ins. trikaṭe
- 523 S5 karokaṭe
- 524 S1 karoṭavīrya
- 525 S1-S5, S7 //
- 526 S1 -mūttikāṃ, S3, S5 -mūrttikāṃ, S4 -mūrttikāṃ
- 527 S1, S2 ekaviśativārān
- 528 S2, S4 āvarttā
- 529 S2, S3, S5 vyādhi
- 530 S1 svasthe, S2 svastha, S5 svasthā
- 531 S1, S3, S5 //, S2, S4, S7 om. /
- 532 S1, S3, S4, S7 om.
- 533 B, S1, S3-S5, S7 siṃha-
- 534 S1, S3, S7 -sādhana
- 535 S7 om.

## 6 チベット語テキスト

No. 17, T 3

rgya gar skad du/ siṃ ha nā da sā dha nam/ bod skad du/ seṅ ge sgra'i sgrub  
thabs/

rje btsun seṅ ge sgra la phyag 'tshal lo/

- (1.1) źal gcig phyag gñis sku mdog dkar/ spyān gsum seṅ ge la  
gnas śiñ/ bla ma nad kun 'joms byad pa'i/ seṅ ge sgra la  
phyag 'tshal lo/
- (1.2) dañ por re źig sñags pas/ kha bsañ pa la sogs la byas te/  
yid dañ 'thun pa'i gnas su gdan<sup>536</sup> bde ba la ñe bar 'dug  
ste/

- (2.1.1) a<sup>537</sup> yig dkar po yoñs su gyur pa las zla ba'i dkyil 'khor/  
de'i sten du hrīḥ yig dkar po sñiñ gar bltas la/ de'i 'od  
zer gyi khams gsum snañ bar byas te/ 'og min gyi gnas su  
soñ ste/ señ ge sgra dañ/ bla ma dañ/ sañs rgyas dañ/ byañ  
chub sems dpa' thams cad gdan drañs te/ mdun gyi nam mkha'  
la bźugs nas/
- (2.1.2) de'i rjes su mchod pa dañ/ sdig pa bśags pa la sogs pa  
bya'o/ de nas tshañs pa'i gnas bži bsgom<sup>538</sup> par byas nas/  
om śū nya tā dzñā na bdzra swa bhā wa<sup>539</sup> ātma ko haṃ źes  
pa'i sñags 'dis stoñ pa ñid du byin gyis brlab par bya'o/
- (2.1.3) de nas smon lam rjes su dran par byas nas paṃ yig dkar po  
yoñs su gyur pa las padma/de'i sten du a<sup>540</sup> yig dkar po  
yoñs su gyur pa las zla ba'i dkyil 'khor/ de'i steñ du āḥ  
yig dkar po yoñs su gyur pa las/ señ ge dkar po/ de'i steñ  
du aṃ yig dkar po yoñs su gyur pa las padma dkar po/ de'i  
lte ba la hrīḥ yig dkar po 'od zer 'phro źiñ 'gyed pa/
- (2.2.1) de thams cad yoñs su gyur pa las señ ge sgra'i gzugs su  
bdag ñid blta bar bya'o/
- (2.2.2) yan lag thams cad dkar źiñ źal gcig phyag gñis pa/ spyan  
gsum pa ral pa'i cod pan bciñs pa/ 'od dpag tu med pas dbu  
brgyan pa/ rgyal po chan po rol pa'i stabs kyis señ ge'i  
khri la bźugs pa/ stag gi pags pa'i na bza' bsnams pa/ de  
bźin gśegs pa lña 'phro źiñ rol pa'i dpa' bo lña dañ zla  
ba phyed pas brgyan pa/
- (2.2.3) phyag g'yon na padma dkar po'i steñ du ral gri dkar po  
dañ/ de dañ ñe bar gnas pa'i padma dkar po'i steñ du me  
tog dri bzañ<sup>541</sup> sna tshogs pas yoñs su gañ ba'i thod pa dkar  
po/
- (2.2.4) g'yas na padma dkar po'i steñ na sprul dkar pos dkris pa'i  
dbyu<sup>542</sup> gu<sup>542</sup> rtse gsum pa dkar po'o/
- (2.2.5) de lta bur gyur pa'i bcom ldan 'das bsgom par bya'o/  
bsgom pas ñal na sñags bzlas par bya'o/ de la sñags ni  
'di'o/ om āḥ hrīḥ siṃ ha nā da hūṃ/ phaṭ swāhā/
- (3.1) cho ga 'dis sku gzugs byas te/ yañ na ras bris<sup>543</sup> byas la/  
bcom ldan 'das kyi mdun du so so'i mañḍala byas la gzuñs  
lan cig bklag par bya'o/
- (3.2) de la gzuñs ni 'di'o/ na mo ratna trā yā ya/ na ma<sup>544</sup> ā rā  
ba lo ke śwa rā ya/ bo dhi satwā ya/ mahā satwā ya/ma hā  
kā ru ñi kā ya/ tadya thā/ om a ka ṭe/ bi ka ṭe ñi ka ṭe/  
kaṭaṃ kaṭe/ ka ro ṭaṃ/ bi dya swā hā/
- (3.3) sa la ma lhuñ ba'i lci ba la mñon par bsñags<sup>545</sup> nas mañḍala  
brgyad byas la/ mañḍala so so la lan bcu gsum gyi bar du

- bklag par bya'o/  
 (3.4) maṇḍala so so'i dri ma lhag pa'i lci ba de la gzuñs lan  
 bdun du mñon par bsñags nas des<sup>546</sup> nad pa la byug par  
 bya'o/  
 (3.5) ñi ma bdun nam/ ñi ma bcu gsum mam/ ñi ma ñi su rtsa gcig  
 gis de bzin du byas pas mtshams med pa lña byad pas kyañ  
 'grub par 'gyur ro/ gal te ma grub na de'i tshe ñas  
 mtshams med pa lña byas 'gyur ro/ <sup>547</sup>-señ ge sgra'i sgrub  
 thab rdzogs so<sup>-547</sup>/  
 (4) bdag gi sgrub thabs cho ga 'dis/ gañ zig nor dañ dge thob  
 ciñ/ mgon po señ ge sgra dañ ni/ 'gro ba rnams ni nad med  
 žog/ pañḍi ta a ba dhu ti dpal ldan gñis med rdo rje žabs  
 kyis mdzad pa'o<sup>548</sup>//

536 P stan

537 P om

538 P bsgoms

539 P ba, P ins. sarba dharmāḥ om śūnya tā dzñā na bdzra swa bhā ba

540 P om

541 P ins. po

542 P dbyug

543 D ris

544 P maḥ

545 P sñags

546 P de yis

547 D om.

548 P pa rdzogs so //

No. 20, T 1

rgya gar skad du/ siṃ ha nā da sā dha nam/ bod skad du/ señ ge sgra'i sgrub  
 thabs/

señ ge sgra la phyag 'tshal lo/

- (1) dañ por gdoñ bkru ba la sogs pa byas nas bde ba'i stan la  
 gnas te/  
 (2.1.1) rnal 'byor pas rañ gi sñiñ gar ñi ma'i dkyil 'khor la yi  
 ge a bltas pas mdun du bla ma dañ sañs rgyas la sogs pa  
 sbyan drañs la sdig pa bsags pa la sogs pa rnams bya'o/  
 (2.1.2) de nas stoñ pa ñid mñon du byas śiñ byin gyus kyañ brlabs  
 la/ smon lam rjes su dran par bya ste/  
 (2.1.3) de las āḥ'i rnam pa yoñs su gyur pa las yi ge hūṃ do/ de  
 yoñs su gyur pa las zla ba'o/ de'i steñ du yi ge om yoñs  
 su gyur pa las padma dmar po/ de yi ge āḥ yoñs su gyur pa

- las señ ge dkar po'o<sup>549</sup>/
- (2.1.4) de'i steñ du yi ge hrīḥ las byuñ ba'i rje btsun señ ge  
sgra ste/
- (2.1.5) dkar po phyog gñis pa ral pa dañ dbu rbyan dañ ldan pa  
dbyan gsum pa dkar thub kyi cha lugs 'dzin pa rgyal po  
chen po'i stabs su bžugs pa
- (2.1.6) phyag g'yon pa nag gnas pa'i padma'i/ steñ na ral gri 'bar  
ba gyen du lañs pa'o/ g'yas na rtse gsum dkar po la sbrul  
dkar po gdeñs ka can gyis dkyis pa'o/ g'yon na me tog dri  
žim po sna tshogs kyi yoñs su bkañ ba'i thod ba dkar po/
- (2.1.7) dbu rgyan la mi bskyod pa bžugs pa de bžin bśeḡs pa lña  
spro bar<sup>550</sup> mdzad pa/ sprul pa chen po'i skur gyur pa bsgom  
par bya'o/
- (2.1.8) bzlas pa'i sñags ni om āḥ hrīḥ siṃ ha na da hūṃ phaṭ/  
'di ni señ ge sgrub thabs so//  
dge sloñ tshul khriṃs rgyal mtshan gyis bsgyur ba'o//

549 P om.

550 P om.

No. 20, T 3

rgya gar skad du/ siṃ ha nā da sā dha naṃ/ bod skad du/ señ ge sgra'i sgrub  
thabs/

rje btsun señ ge sgra la phyag 'tshal lo/

- (1) rnal 'byor pas dañ por kha bsañ ba la sogs pa byas nas  
stan bde ba la 'dug ste/
- (2.1.1) rañ gi sñiñ ga ñi ma'i dkyil 'khor la āḥ<sup>551</sup> yig bltas nas  
mdun du bla ma dañ/ sañs rgyas la sogs pa gdan drañs nas  
sdig pa bśags pa la sogs pa bya'o/
- (2.1.2) de nas stoñ pa ñid mñon du byas siñ byin gyis brlabs nas  
smon lam rjes su dran par bya'o/
- (2.1.3) de nas a<sup>552</sup> yig yoñs su gyur pa las hūṃ yig/ de yoñs su  
gyur pa las zla ba'i steñ du/ om yig yoñs su gyur pa las  
padma dmar po/
- (2.1.4) de'i steñ du āḥ yig yoñs su gyur pa las señ ge dkar po/  
de'i steñ du zla ba la hrīḥ las byuñ ba'i rje btsun señ ge  
sgra
- (2.1.5) dkar po ral pa'i cod pan can/ spyen gsum pa/ phyag gñis  
pa/ dka' thub kyi cha lugs 'dzin pa/ rgyal po chen po rol  
pa'i stabs kyi bžugs pa/

- (2.1.6) phyag g'yon na padma lañs pa'i steñ na 'bar ba'i ral gri  
 gyen du 'phyar ba/  
 g'yas na sprul dkar pos dkris pa'i rtse gsum dkar po  
 bsgoms pa/ g'yon na me tog tri bzañ po sna tshogs pas gañ  
 ba'i thod pa dkar po/  
 (2.1.7) 'od dpag tu pas dbu rgyan ciñ/ de bžin gśegs pa lña 'phro  
 ba sprul pa'i sku chen po bsgom par bya'o/  
 (2.1.8) bzlas pa'i sñags ni om āḥ hrīḥ siṃ ha nā da hūṃ phaṭ ces  
 so/

551 D reads a  
 552 P reads āḥ

No. 21, T 1

rgya gar skad du/ siṃ ha nā da dha rā ṇi/ bod skyad du/ señ ge sgra'i gzuñs/

- (1) na mo ratna tra yā ya/ nama<sup>553</sup> arya a ba lo ki te śva ra ya  
 bo dhi satvā ya ma hā sat vā ya ma hā ka ru ṇi kā ya/  
 tadya thā/ om a ka ṭe bi ka ṭe ṇi ka ṭe ka ṭam ka ṭe ka ro  
 ṭa bīr ye svāhā/  
 (2.1) 'di ni bcom ldan 'das 'phags pa 'jig rten dbaṅ phyug gi  
 mdun du nañ par sña mor ba'i lci ba sa la ma lhuñ bas  
 maṅḍala brgyad byas ste/ maṅḍala re re žiñ lan bcu<sup>554</sup> gsum  
 du bzlas par bya ba'o/  
 (2.2) de nas lan bdun du ba'i lci ba lhag ma mñon par sñags la  
 nad pa la byug par bya ste/  
 (3) nad rnams thams cad<sup>555</sup> ži bar 'gyur ro/ gal te mtshams med  
 pa lña byas pas kyañ ṇi ma bdun pa 'am bcu gsum pa 'am ṇi  
 ma ṇi šu rtsa gcig pa la yañ ma grub na de'i tshe ṇa ṇid  
 kyis mtshams med pa lña byas pa yin žin/ nas sañs rgyas  
 bcom ldan 'das rnams bslus par yañ 'gyur ro/  
 señ ge sgra žes byas ba'i gzuñs rdzogs so//  
 dge sloñ tshul khrims rgyal mtshan gyis bsgyur ba'o//

553 P namaḥ  
 554 D om.  
 555 P ins. ñe bar

No. 21, T 3

- (1) na mo ratna tra yā ya/ na maḥ ā ryā ba lo ki te śwa rā ya/  
 bo dhi satwāya/ mahā satwa ya/ mahā kā ru ṇi kā ya/ tadya

thā/ om̄ a ka ʔe/ bi ka ʔe ɳi ka te/ ka ʧam̄ ka ʔe/ ka ro  
ʔe/ ka ro ʧam̄/ birya swāhā/

- (2.1) 'di rnams 'phags pa spyan ras gzigs dbaṅ phyug gi mdun du  
sṅar sa la ma lhuṅ ba'i lci ba blaṅs nas maṅḍala brgyad  
byas te/ maṅḍala so so la lan bcu gsum bzlas par bya'o/  
(2.2) de nas lan bdun pa'i lci ba lhag ma la mñon par bsṅags  
nas/ nad pa la ñe bar byug par bya'o/  
(3) nad thams cad ñe bar ʒi bar 'gyur ro/ gal te ñi ma bdun  
nam/ bcu gsum mam/ ñi šu rtsa gcig tu byas na mtshams med  
pa lña byas pas kyaṅ 'grub par 'gyur ro/ gal te ma grub  
na<sup>556</sup> de'i tshaṅs mtshams med pa lña byas par 'gyur ro/  
seṅ ge sgra'i sgrub thabs rdzogs so//

556 P nas

Nos. 22, 23, T 1

rgya gar skad du/ siṃ ha nā da sā dha nam̄/ bod skad du/ seṅ ge sgra'i sgrub  
thabs/

- (1) daṅ por re ʒig sṅags pas bṅin gyis<sup>557</sup> gtsaṅ sbra la sogs pa  
byas pa bde ba'i stan la gnas te/  
(2.1.1) raṅ gi sñiṅ gar zla ba'i dkyil 'khor la yi ge hrīḥ dkar po  
dmigs la/ de'i 'od zer gyis legs par spyan draṅs pa'i bla  
ma daṅ saṅs rgyas daṅ byaṅ chub sems dpa' rnam mdun du  
bsgom par bya ba'o/  
(2.1.2) de'i rjes su mchod pa daṅ sdig pa bṅags pa la sogs pa byas  
la/ stoṅ pa ñid legs par bsgom par bya ʒiṅ/ om̄ stoṅ pa ñid  
kyi ye šes rdo rje'i raṅ bṅin gyi bdag ñid ni ṅa yin no  
ʒes bya ba 'dis byin gyis brlab par yaṅ bya ba'o/  
(2.1.3) de nas de ma thag tu yi ge paṃ yoṅs su gyur pas padma  
dkar po'o/ de'i steṅ du yi ge siṃ<sup>558</sup> yoṅs su gyur pa las seṅ  
ge dkar po'o/  
(2.2.1) de'i rgyab tu zla ba la yi ge hrīḥ las kun nas byuṅ ba'i  
'jig rten dbaṅ phyug seṅ ge sgra'i skur bdag ñid bsgom par  
bya ba'o/  
(2.2.2) dkar po phyag gñis pa snaṅ ba mtha' yas daṅ ral pa daṅ  
dbu rgyan can/ spyan gsum pa dka' thub kyi cha byad 'dzin  
pa rgyal po chen po'i 'gyiṅ bag gyis bṅugs pa/  
(2.2.3) phyag g'yon na padma laṅs pa'i steṅ na ral gri laṅs pa'o/  
g'yas na rtse gsum dkar po la sbrul dkar po gdeṅs ka daṅ  
ldan pas dkris pa'o/ g'yon na me tog dri ʒim po sna tshogs

kyis yoñs su bkañ ba'i thob pa dkar po'o/ de bzin gžegs pa  
lña 'phro bar mdzad pa/ mya ñan las 'das pa chen po'i skur  
bsgom par bya ba'o/

- (2.2.4) bzlas pa'i sñags ni om̄ aḥ hrīḥ siṃha<sup>559</sup> nā da hūṃ phaṭ/  
(3.1) de'i rjes thogs la ni gzuñs yin te/ dkon mchog gsum la  
phyag 'tshal lo/ thugs rje chen po dañ ldan pa'i byañ chub  
sems dpa' sems dpa'chen po 'phags pa spyan ras gzigs dbañ  
phyug la phyag 'tshal lo/ 'di lta ste/ om̄ a ka ṭe bi ka ṭe  
ṇi ka ṭe ka ṭam̄ ka ṭe ka ro ṭa bī ra ye swā hā/  
(3.2) bya ba 'di'i rim pa ni pa'i lci ba ma lhañ bar<sup>560</sup> nañ par  
śin tu sña bar bcom ldan 'das kyī spyan sñar maṇḍala  
brgyad bya ste/ maṇḍala re re žiñ lan bcu gsum mrjes su  
rjod par bya ba'o/  
(3.3) ba'i lci ba'i lhag ma lan bdun du mñon par sñags la nad  
pha la ñe bar byug par bya ste/  
(3.4) nad rnams thams cad ñe bar ži bar byed pha yin no/ gal te  
mtshams med pa lña byas pa rnams kyis kyañ ñi ma bdun  
nam<sup>561</sup> űi ma bcu gsum mam ñi ma ñi šu rtsa gcig na yañ 'di  
'grub par ma gyur na ni/ de'i tshe ña ñid mtshams med pa  
lña byed par 'gyur ba yin no/

señ ge sgra'i sgrub thabs so/

pa ṇḍi ta ratna a ka ra'i žal sña nas/ dge sloñ/ tshul khirms rgyal mtshan gyis  
bsgyur ba'o//

- 557 D gyi  
558 D si  
559 P siṃha  
560 P bas  
561 P nas

Nos. 22, 23, T 2

rgya gar skad du siṃ ha nā da sā dha nam̄/ bod skad du señ ge sgra'i sgrub pa'i  
thabs/

'phyags pa señ ge'i sgra la phyag 'tshal lo/

- (1) dañ por re žig sñags pas gdoñ bkru ba la sogs byas<sup>562</sup> nas/  
bde ba'i gdan la 'dug ste/  
(2.1.1) rnal 'byor pas rañ gi sñiñ gar zla ba'i dkyil 'khor la yi  
ge hrīḥ bltas la mdun du bla ma dañ/ sañs rgyas dañ/ byañ  
chub sems dpa' rnams bsgom par bya'o/  
(2.1.2) de'i rjes la mchod pa dañ/ sdig pa bśags pa la sogs pa bas  
nas stoñ pa ñid bsgom par bya ste/ om̄ šūñya tā dzñāna

- bdzra sva bhā wa<sup>563</sup> ātma ko 'ham/ zēs brjod pas byin gyis  
brlabs la/  
(2.1.3) de nas skad cig tsam gyis<sup>564</sup> yi ge paṃ yoṃs su gyur pa las/  
padma dmar po de'i steñ du yi ge yoṃs su gyur pa la señ  
ge dkar po/  
(2.2.1) de'i steñ du zla ba la hriḥ las yañ dag par byuñ ba'i rdze  
btsun señ ge sgra'i<sup>565</sup> sku<sup>566</sup> gzugs su bsgom<sup>567</sup> ste<sup>568</sup>/  
(2.2.2) sku mdog dkar po ral pa'i thor tshugs can/ spyān gsum pa/  
phyag gñis pa/ dka' thub can gyi ḥa byad 'dzin pa/ rgyal  
po rol pas<sup>569</sup> gnas pa'o/  
(2.2.3) phyag g'yon pas ni padma bsgeñ ba'i steñ na ral gri 'bar  
bas brgyan pa'o/ g'yas su sbrul dkar pos dkris pa'i mduñ  
rtse gsum pa'o/ g'yon du dri źim po'i me tog<sup>570</sup> gi  
tshogs kyis bkañ ba'i thod pa dkar po'o/sku las de bzin gśeḡs pa  
lña 'phro ba'i gzugs su bsgoms la/  
(2.2.4) sñags 'di bzlas bar bya'o/ om āḥ hriḥ siṃ ha na da hūṃ  
phaṭ/  
(3.1) sñon du bsñen pa 'bum phrag gcig bzlas pa bya'o/ de nas  
nam ratna tra yā ya/ nam<sup>571</sup> ārya a ba lo ki te śva rā ya/ bo  
dhi sa tva ya/ ma hā satva ya/ ma hā ka ru ṇi kā ya/  
tadya thā/ om a ka ṭe bi ka ṭe ni ka ṭe ka ṭam ka ṭe<sup>572</sup>/ ka ro ṭa  
ba re svā hā/  
(3.2) 'di'i ñe bar spyod pa ni bcom ldan 'das kyī mdun du gzuñs  
sñags 'dis<sup>573</sup> sa la lhuñ ba'i lci bas mañḍala brgyad phul  
te/ mañḍala re re źiñ lan bcu gsum rjes<sup>574</sup> su<sup>574</sup> brjod  
par bya'o/  
(3.3) de nas lci ba lhag ma de ñid la mñon par sñags te/ lus la  
ñe bar dbyugs na  
(3.4) nad thams cad rab tu źi bar 'gyur ro/ gal te mtshams med  
pa'i las byas<sup>575</sup> kyañ ñid ma bdun nam bcu bzi 'am/ ñi śu  
rtsa gcig gi sa ma grub na de'i tshe bdag gis mtshams med  
pa lña byas yin no//

señ ge sgra'i sgrub thabs slob dpon tsandra go mis mdzad pa rdzogs so// pañḍita  
don yod rdo rje dañ/ khams pa lo tstsha ba dge sloñ ba ris bsgyur ba'o//

562 P ins. pa

563 P ba

564 P gcis

565 P om.

566 P ins. sprul pa'i

567 P bsgoms

568 P te

569 P pa'i

- 570 P tag  
 571 P ins. maḥ  
 572 P re  
 573 P 'di  
 574 P om.  
 575 P ins. pas

Nos. 22, 23, T 3

rgya gar skad du/ ā rya siṃ ha nā da sā dha naṃ/ bod skad du/ 'phags pa seṅ  
 ge sgra'i sgrub thabs/

rje btsun seṅ ge sgra la phyag 'tshal lo/

- (1) dañ por re žig sñags pas kha bsañ ba la sogs pa byas nas  
 stan bde ba la 'dug te<sup>576</sup>/
- (2.1.1) rañ gi sñiñ gar zla ba'i dkyil 'khor la hrīḥ yig dkar po  
 bltas nas/ de'i 'od zer gyis<sup>577</sup> mdun du bla ma dañ/ sañs  
 rgyas dañ/ byañ chub sems dpa' rnam sgdan drañs par bsgoms  
 nas/
- (2.1.2) de nas mchod pa dañ/ sdig pa bśags pa la sogs pa byas nas  
 stoñ pa ñid bsgom par bya'o/ om sūnya tā dzñā na bdzra swa  
 bhā ba ātma ko 'ham<sup>578</sup>/ zes pa 'dis byin gyis brlab par  
 bya'o/
- (2.1.3) de nas skad cig gis paṃ yig yoñs su gyur pa las padma dmar  
 po/ de'i steñ du siṃ yig yoñs su gyur pa las seṅ ge dkar  
 po'o/
- (2.2.1) de'i steñ du zla ba la hrīḥ yig las byuñ ba'i 'jig rten  
 dbañ phyug seṅ ge sgra'i skur bdag ñid bsgom par bya'o/
- (2.2.2) sku mdog dkar po ral pa'i cod pan can/ 'od dpag tu med pas  
 dbu brgyan pa/'spyan gsum pa/ phyag gñis pa/ dka' thub kyi  
 tshul 'dzin pa'o/ rgyal po chen po rol pas bźugs pa/
- (2.2.3) phyag g'yon na padma lañs pa'i steñ du ral gri 'bar ba/  
 g'yas na sbrul dkar pos dkris pa'i rtse gsum dkar po/  
 g'yon na dri žim po'i me tog sna tshogs pas bkañ ba'i thod  
 pa dkar po'o/ de bzin gśegs pa lña 'phro žiñ sbrul<sup>579</sup> pa  
 chen po'i skur bsgom par bya'o/
- (2.2.4) bzlas pa'i sñags ni/ om āḥ hrīḥ si ha nā da hūṃ phaṭ/
- (3.1) de nas gzuñs bzlas te/ na mo ratna tra ya yā/ na ma ārya  
 ba lo ki te śwa rā ya/ bo dhi satwa yā/ mahā satwā ya/  
 mahā ka ru ṇi ka ya/ tadya thā/ om a ka ṭe/ bi ka ṭe ṇi ka  
 ṭe ka ṭaṃ ka ṭe/ ka ro ṭe/ ka ro ṭaṃ bidyā swāhā/
- (3.2) sñags 'di brjod nas bcom ldan 'das kyi mdun du nam lañs pa  
 dañ/ sa la lhuñ ba'i lci ba la maṇḍala brgyad byas

- nas maṇḍala so so la lan bcu gsum bzlas par bya'o/  
(3.3) lci ba lhag ma la lan bdun mñon par bñags nas nad pa la  
byug par bya'o/  
(3.4) des nad thams cad ñe<sup>580</sup> bar<sup>580</sup> źi bar 'gyur ro/ ñi ma bdun  
nam/ ñi ma bcu gsum mam/ ñi šu rtsa gcig de bźin du byas  
pas mtshams med pa lña byed pas kyañ 'grub par 'gyur ro/  
gal te de'i tše ma grub na ñas mtshams med pa lña byas  
par 'gyur ro//  
señ ge'i sgra'i sgrub thabs rdzogs so//

576 P ste  
577 P gyi  
578 P ham  
579 P sprul  
580 P om.

No. 25, T 3

rgya gar skad du/ śrī sim ha nā da sā dha nam/ bod skad du/ dpal<sup>581</sup> señ ge  
sgra'i sgrub thabs/

- (1.1) dpal ldan señ ge sgra la phyag 'tshal lo/ nad kum 'joms  
byed bla ma ste/ señ ge sgra phyag 'tshal lo/ rnal 'byor  
bsgoms pa tsam gyis ni/ sdig pa kun las grol bar 'gyur/  
(1.2) dañ por re źig kha bsañ ba la sogs pa byas te/ gos gtsañ  
mgon nas sa gźi gtsañ mar stan bde ba la ñer bar 'dug ste/  
(2.1.1) rañ gi sñiñ gar zla ba la hrīḥ yig bsgom par bya'o/ de'i  
'od zer gyis de bźin gśegs pa thams cad gdan drañs te/  
mchod par byas nas sdig pa bśags pa la sogs pa bya'o/  
(2.1.2) de nas byams pa dañ/ sñiñ rje dañ/ dga' ba dañ/ btañ sñoms  
rnams rnam par bsgoms te/ rañ bźin gyis dag pa'i sñags  
brjod pa sñon du 'gro bas stoñ pa ñid bsgom pa bya'o/ om  
swa bhā ba śuddhaḥ sarba dharmāḥ swa bhā ba śuddhao 'ham<sup>582</sup>/  
om šū nyatā dzñāna bdzra swa bhā wa<sup>583</sup> ātma ko ham<sup>584</sup> źes so/  
(2.1.3) de nas rañ gi lus sgra brñan dañ 'dra bar bltas nas ra<sup>585</sup>  
yig dmar po yoñs su gyur pa las padma dmar po 'dab ma  
brgyad pa'i sten du āḥ yig yoñs su gyur pa las/ señ ge  
dkar po/  
(2.2.1) de'i steñ du hrīḥ yig de'i 'od zer gyis de bźin gśegs pa  
rnams dgan drañs sñiñ/ bdag ñid bcug nas 'jig rten dbañ  
phyug señ ge sgra bsgom par bya'o/  
(2.2.2) sku mdog dkar po spyan gsum pa/ ral pa'i cod pan gyis  
brgyan pa/ stag gi bags pa'i bza' bsname pa/ señ ge dañ/

- zla ba'i gdan la rgyal po chen po rol pa'i stabs kyis  
 bźugs pa źla ba'i 'od lta bu bsgom par bya'o/
- (2.2.3) phyag g'yas na sbul dkar po bkris pa'i rtse gsum dkar  
 po'o/ phyag g'yon na padma lañs pa'i steñ na ral gri 'bar  
 ba'o/ g'yon na me tog dri źim po sna tshogs pas gañ ba'i  
 padma'i snod do/ rañ gi lus las de bźin gśeigs pa lña 'phro  
 bar blta'o/
- (2.2.4) de nas rañ gi sñiñ ga'i sa bon gyi sa ye śes sems dpa'  
 bkug ciñ bcug nas de bźin gśeigs pa rñams 'phro źiñ bdag  
 ñid la dbañ bskur nas/ 'od dpag tu med pas dbu brgyan  
 ciñ/
- (2.2.5) rgyas btap par bsam par bya'o/ de nas sñags bzlas par  
 bya'o/ lha rñams kyi gzugs kyis so/ de la sñags 'di'o/ om  
 āḥ hrīḥ siṃ ha nā da hūṃ phaṭ swāhā/
- (3.1) de nas mchod pa'i phyir dri bzañs la sogs pa'i mañḍala<sup>586</sup>  
 byas la me tog la sogs pa dbul źiñ mchod par bya'o/
- (3.2) yañ phreñ ba'i sñags bzlas par bya'o/ na mo ratna tra yā  
 ya/ na maḥ āryā ba lo ki te śwa rā ya/ bo dhi satwā ya/ ma  
 hā satwā ya mahā kā ru ñi kā ya/ tadya thā/ om āḥ ka ṭe/  
 bi ka ṭe/ ñi ka ṭe/ kaṭaṃ kaṭe/ ka ro ṭaṃ karōṭaṃ<sup>587</sup> birya  
 swāhā/
- (3.3) sñags 'dis mañḍala gyi gzugs bzuñ nas lan ñi śu rtsa gcig  
 bzlas nas/ nad pa byugs na 'tsho bar 'gyur ro/  
 'jig rten dbañ phyug señ ge sgru'i sgrab thabs rdzogs so//

581 P ins. ldan

582 P ham

583 P ba

584 P ham

585 D raṃ

586 P ins. la sogs pa

587 P om.

## 付 記

本稿は、平成二年度国立民族学博物館共同研究「南アジア諸パンテオンの表現方法」（代表者立川武蔵）の成果の一部である。

南アジアでは、主としてバラモン教、仏教（特に密教）、ヒンドゥー教において、神々、あるいは、諸尊の組織体（パンテオン）が形成されてきた。この形成過程において、神々の表出方法に変化がみとめられる。この研究では、特に観自在菩薩を取り上げ、その歴史的な変化を理解するための基礎的な資料を提示した。

原稿作成に際し、国立民族学博物館助教授永ノ尾信悟氏に多くの有益な助言を頂いた。記して感謝する次第である。

## 文 献

### (1) 第一次文献

#### (1-1) サンスクリット文献

*Abhidharmakośabhāṣya*.

[PRADHAN 1975] 参照。

*Aṣṭādhyāyī*. Vol. 1, Delhi: Motilal Baranaisidass. Vasu, śrīśa Chandra (ed. and tr.) 1962 (first published 1891)

*Guhyasamājantra*

[MATSUNAGA 1978] 参照。

*Katyāyana Śrauta Sūtra*. the Chowkhamba Sanskrit Series No. 415, Benares: Pandit śrīvidyā dhara śarmā (ed.) Chowkhamba Sanskrit Series office, 1933.

*Mahābhārata*.

Vols. 16–18. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, for the first time crit. ed. by Sukhthankar, V. S. (and others) 1966, 1960.

*Nepāla-rājakīya-Vīrapustakālayasthapustakānām Bṛhatsūcīpatram*. Purātattvapraśāsanamālā 39. Kāthmāṇḍū: Vīrapustakālaya.

*Rig Veda*.

[AUFRECHT 1968] 参照。

*Sāghanamālā*.

2 Vols. Gaekward's Oriental Series Nos. 26, 41 Baroda: Oriental Institute. Bhattacharyya, Benoytosh (ed.), Reprint 1968 (first ed. 1925).

#### (1-2) その他

『大正新修大蔵経』 vols. 14. 19.

### (2) 第二次文献

ALPER, P. Harvey (ed.)

1989 *Mantra*. New York: State University of New York Press.

アモーガヴァジュラ, ヴァシュラーチャルヤ

1983 『ネパール百八観音紹介』高岡秀暢訳 百八観音木刻図像集刊行会。

AUFRECHT, Theodor (ed.)

1968 *Die Hymnen des Rigveda*. Vol. 2, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

BHARATI, Agehananda

1965 *The Tantric Tradition*. London: Rider & Lompany.

BANERJI, R. D.

1933 *Eastern Indian School of Mediaeval Sculpture*. Archaeological Survey of India, New Imperial Series, Vol. 47.

BHATTACHARYYA, Benoytosh

1968 *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.

BÜHLER, Georg

1901 Grundriss der Indo-Arischen Philologie und Altertumskunde. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.

BÖHTLINGK, Otto und Rudolph ROTH

1868 *Sanskrit-Wörterbuch*. St. Petersburg: Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften.

CLARK, Walter Eugene

1965 *Two Lamaistic Pantheons*. New York: Paragon Book Reprint Corp.

- CROOK, W.  
1910-1953 Charms and Amulets (Indian). In James Hastings (ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, Vol. 3 (BURIAL-CONFESSIONS) T. & T. Clark. pp. 141-448.
- FOUCHER, A.  
1905 *Etude sur l'iconographie buddhique de l'Inde d'après des documents nouveaux*. Part 2. Paris: Ernst Leroux. Editeur.
- EDGERTON, Franklin  
1970 *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. 2 Vols. Motilal Banarasidass.  
エリアーデ, ミルチャ  
1981 「ヨーガ2」立川武蔵訳『エリアーデ著作集』第十巻 せりか書房。
- GETTY, Allice  
1962 *The Gods of Northern Buddhism*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company.
- GRIFFITH, R. T. H.  
1896 *The Hymns of the Rigveda*. Translated with a popular commentary. Vol. 1, Benares: E. J. Lazarus and Co.
- GONDA, J.  
1980 *Vedic Ritual*. Leiden-köln: E. J. Brill.
- GOSHIMA, Kiyotaka and Keiya NOGUCHI (compiled)  
1983 *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Faculty of Letters, Kyoto University*. Kyoto.
- GRÜNWEDEL, Albert  
1970 (1900) *Mythologie des Buddhismus*. Osnabrück: Otto Zeller Verlag, Reprint.
- GUPTA, R. S.  
1980 (1972) *Iconography of the Hindus, Buddhists and Jains*. Bombay: D. B. Taraporevala Sons and Co.
- 逸見梅栄  
1935 『インドにおける礼拝像の形式研究』東洋文庫論集 20。  
1975 『中国喇嘛教美術大観』東京美術。
- HUNTINGTON, Susan L.  
1984 *The Pāla-sena Schools of Sculpture*. Leiden: E. J. Brill.
- 井狩彌介  
1989 「ヴェーダ祭式の思考と世界観」『インド思想 3』岩波講座・東洋思想 第7巻 岩波書店, pp. 49-64。
- ISHIHAMA, Yumiko and Yoichi FUKUTA  
1989 *A New Critical Edition of the Mahāvūyapatti*. Studia Tibetica No. 16, The Toyo Bunko.  
岩本 裕  
1978 『仏教説話の伝承と信仰』仏教説話研究 第三巻 開明書院。
- 金岡秀友  
1969 『密教の哲学』サーラ叢書 18 平楽寺書店。
- 小林太市郎  
1951 「執金剛と不動尊」仏教芸術学会編『仏教芸術』13: 53-79。
- 肥塚 隆  
1967 「瞑想と造形——インド美術における一つの基礎理念——」『南都仏教』20: 60-79。
- LIEBERT, Gösta  
1976 *Iconographic Dictionary of the Religions*. Leiden: E. J. Brill.
- LOKESH CHANDRA  
1986 *Buddhist Iconography of Tibet*. 2 Vols. Kyoto: Rinsen Book Co.  
町田甲一(編)  
1968 『ニューデリー博物館』世界の美術館 9, 講談社。
- MALLMANN, Marie-Thérèse de  
1948 *Introduction à l'Etude d'Avalokiteśvara*. Paris: Civilisations du Sud.

佐久間 インド密教の図像学的資料(1)

MATSUNAGA, Yukei

1978 *The Guhyasamājatantra*. Tokyo: Toho publication. (『秘密集会タントラ校訂梵本』東方出版株式会社)。

MATSUNAMI, Seiren

1965 *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in Tokyo University Library*. Tokyo: Suzuki Research Foundation.

MONIER, Williams

1899 *A Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: The Clarendon Press. Reprinted by Meicho Fukyukai Co., Ltd. Tokyo (1986).

MUKHOPADHYAY, Santi Priya

1985 *Amitābha and his Family*. Delhi: Agam kala Prakashan.

長尾雅人・丹治昭義 (訳)

1974 『維摩経, 首楞嚴三昧経』大乘仏典 7 中央公論社。

中村 元 (編著)

1988 『図説仏教語大辞典』東京書籍。

NATH, Amarendra

1986 *Buddhist Images and Narratives*. New Delhi: Books and Books.

奥山直司

1988 「チベット仏教パントオン形成に関する二つの課題」『印度学仏教学研究』36(2):886-892。

1989 「無上瑜伽類」塚本啓祥, 松長有慶, 磯田熙文編『梵語仏典の研究』Ⅳ 密教経典篇 平楽寺書店, pp. 344-490。

大鹿実秋

1970 「チベット文維摩経テキスト」『インド古典研究 ACTA INDOLOGICA I』成田山新勝寺。

POUSSIN, Vallée

1909-1953 Avalokiteśvara. In James Hastings (ed.), *Encyclopaedia of Religion and Ethics*, Vol. 2 (ARTHUR-BUNYAN). T. & T. Clark, pp. 256-261.

PRADHAN, P. (ed.)

1975 *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. Patna: K. P. Javaswal Research Institute.

酒井紫明

1950 「密教芸術に関する西蔵伝訳資料概観」仏教芸術学会編『仏教芸術』7: 114-117, 毎日新聞社。

佐伯旭雅 (編)

1881 『冠導阿毘達磨俱舍論』法蔵館。

佐久間留理子

1990 「『サーダナ・マーラー』の梵文写本について」『東海仏教』35: 87-103。

STAAL, Frits

1989 Vedic Mantra. In Alper P. Harvey (ed.), *Mantra*, New York: State Univ. of New York Press, pp. 48-95.

SCHIEFNER, Anton

1869 *Tāranātha's Geschichte des Buddhismus in Indien*. St. Petersburg: Commissionäre der Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften. Reprinted by Suzuki Gakujutsu Zaidan, Tokyo (1963).

清水 乞

1976 「インド宗教儀礼と造形——『サーダナ・マーラー』を中心として——」『日本仏教学会年報』43: 59-71。

1979 「後期インド密教図像と情趣論」『東洋学論叢』32: 21-69。

静谷正雄

1987 『初期大乘仏教の成立過程』百華苑刊。

SKORUPSKI, Tadeusz

1983 *The Sarvadurgatipariśodhana tantra*. Delhi: Motilal Banarsidass.

立川武蔵

- 1978 「密教と呪術」『密教の理論と実践』講座密教1 春秋社、pp. 196-222。  
 1983 A Hindu Worship Service in Sixteen Steps, *Shoḍaśa-upacāra-pūjā*. 『国立民族学博物館研究報告』8(1): 104-186。  
 1986 「金剛ターラーの観想法」町田甲一先生古稀記念会編『論叢仏教美術史』吉川弘文館、pp. 65-97。  
 1987a 「仏教図像」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』冬樹社、pp. 336-363。  
 1987b 『曼荼羅の神々』ありな書房。  
 1987c 『西藏仏教宗義研究』第五巻——トゥカン『一切宗義』カギユ派の章——(Studia Tibetica No. 13) 財団法人東洋文庫。  
 1989 「マンダラ——構造と機能——」『インド仏教 3』岩波講座・東洋思想 第10巻 岩波書店、pp. 289-314。

高田仁覚

- 1978 『インド・チベット真言密教の研究』密教学術振興会。

高島 淳

- 1989 「タントリズムにおける言葉の呪力」『インド思想 3』岩波講座・東洋思想 第7巻 岩波書店、pp. 139-155。

梅尾祥雲

- 1927 『曼荼羅及研究』高野山大学出版部。

辻直四郎

- 1983 『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫。

トゥッチ, ジュセッペ

- 1984 『マンダラの理論と実践』ロルフ・ギーブル訳 平河出版社。

VOSTRIKOV, A. I.

- 1970 *Tibetan Historical literature*. Soviet Indology Series No. 4, Calcutta: R. D. Press.

WADDELL, L. A.

- 1894 Polycephalic Images of Avalokita in India. *Journal of the Royal Asiatic Society*. Jan. pp. 385-386, pl. i-iii.  
 1912 The 'Dhāraṇī' Cult in Buddhism, its origin, deified Literature and Images. *Ostasiatische Zeitschrift*. Vol. 1, pp. 155-195.

渡辺照宏

- 1982 「XXI Adhiṣṭhāna (加持) の文献学的試論」『渡辺照宏仏教学論集』築摩書房、pp. 459-555。

頼富本宏

- 1982 「ラマ教の美術」種智院大学インド・チベット研究会編『チベット密教の研究——西チベット・ラダックのラマ教文化について——』永田文昌堂、pp. 93-216。  
 1989a 「仏教パネオンの発展形態」『人文学報』63: 79-91。  
 1989b 「陀羅尼の展開と機能」『インド仏教 3』岩波講座・東洋思想 第10巻 岩波書店、pp. 315-339。

吉崎一美

- 1979 「Sāghanamālā 研究・資料編(1)」『東洋大学大学院紀要』16: 15-31。

ZIMMER, Heinrich

- 1984 (1955) *The Art of India Asia*. In Joseph Campbell (completed and ed.), Vols. 2., Delhi: Motilal Banarsidass, first indian ed.